
RAINBOW! ~ wanders of comet ~

七須木雨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAINBOW！～wanders of comet～

【Nコード】

N5778U

【作者名】

七須木雨人

【あらすじ】

虹――。それは、太陽の光が引き起こす幻想的な光景。

光と水が生み出した奇跡といってもいいその「虹」という名前をつけるのがふさわしいであろう、七人の英雄たちによる、奇跡の物語が、幕を開ける。

虹は、主役となる色が存在しない。ひとしく七色全てが実体なく存在している。

それと同じ。この物語も、主人公という座についている者は、一人ではないのだ。

く上を読んでクリックをためらった人（笑）へく大丈夫！気持ちはい分かるから！でも、堅い話にならないことは絶対に保証するんでクリックしてね。むしろ、この文とのギャップにビックリするよ、これは。

作者全員の名前が知りたい方は、キーワードをチェックして下さい。本編で確かめるより手っ取り早いです。あ、順番は執筆順です。あとと言うことがあると・・・更新はのんびりです。なんかやたらと。でも途中で消滅するようなことは無いのでご安心を。

第零話　く人物紹介く（前書き）

始めました、六人の作者による合同執筆小説、RAINBOW。もともとは一つの本がきっかけで出会った僕らですが、こうして作品を作り出すことができて、とてもよかったと思います。

どのようなものになるかわかりませんが、六人の主人公たちと一緒に、最期までついてきてくだされば幸いです。

さあ、七人目のメンバーになったつもりで、物語を見届けてください！

この下にある長いのを読む気がない人へ。その気持ちには限りなく共感できるので、一番下に必要最低限のことだけ（名前だけなど。能力についてはどうかで説明来るので問題なし）まとめてみました。他の作者には怒られるかもしれないから内緒だよ？

第零話　～人物紹介～

旅人プロフィール

～1人目～

名前：クラディー・ウエル（通称『クラ』）

性別：男

種族：人間（本人曰く『一部を除く』らしい）

年齢：17

武器：『封魔刀』　銘：フォーティトユード《不屈》

——— その刃で触れたいかなる魔法をも吸収して丸一日かけ魔力にし、持ち主に還元する力がある（封魔）。防御にはとても便利だが、きっかり24時間経たないと吸収した魔力を使えないのがネック。

見た目：黒目黒髪な約175cmの（やや）長身で、いかにも無邪気な顔つきで、軽く恰好を変えるだけで本人の演技力とも相まって女の子にも見えるようになるほどの優男風。また、表情により15ぐらいにも20代にも見え、どちらととってもおかしくないような雰囲気がある。

基本戦術：本来は剣、拳、魔法となんでもこなすオールラウンダーなのだが、自分のことをまだまだ弱いと思っているので実力で押し

切るより精神戦や演技力で相手の動きを封じてからトドメをさす、
といういわゆる『セコい』戦い方をよくする。だからなのか、演技
に関してはなかなか上手で、地形などの利用も抜群に上手い。
ただし性格的にウソはつかず、相手の心の傷には触れない、といっ
たポリシーも持っている。

特殊能力：？自己流魔法

——常に持つ『封魔力フォートユード』の
せいで普通の魔法は使えない。その為自己流で作り上げた（とはい
えこの世界、約五割の魔法使いがそれぞれ自己流でやっているのだ
が）魔法を使うが、魔法体形が特殊すぎるので知り合いが見ればど
れほど変装しても一発でばれてしまう。また、一人で作っているの
で数がイマイチ少ない。いまだ構想中。

？るいひょうがん瑠璃の氷眼

——普段は黒い左目。自由意思により
光を放つ澄んだ瑠璃色になり、この状態になると氷を始めとした、
様々な低温を操ることができる。その威力は並の魔法を軽く上回り、
しかも反動がないため彼の魔法に氷や冷気を操るものは（作って）
ない。色々と応用が効くので、『翼』の形にして文字通り空を飛ん
だり（スピードは出るがやたら精神的に疲れるらしい）、腕に冷気
をまとわりつかせリアル版『れいとうパ○チ』なども可能。
ただ、これまた目立つので人前ではなるべく使わないようにしてい
る。

ちなみに、右目は普通の目。

性格：そこそこ・・・否、やたらと明るい。人当たりもいい
が、シリアスな時は極端なまでにシリアスになる。良くも悪くも振
れ幅が大きい。

経歴：子供のときに『何か』あつたらしく、小さいときのこと
はなかなか語りたがらない。どうも、『氷眼』と何か関係があるよ
うだが……？

今はなにかしら目的があつて旅をやっているようで、『瑠璃の氷眼』
はその時につけられた二つ名。また、端折りまくって『氷眼ウエル』
と呼ばれることもある。

別に傭兵ではないのだが、似たようなことをして生活の助けにしてい
る。そのうちちゃんとした傭兵として登録しようかな、とは本人
の弁。

ほぼチートのように聞こえるが、実際は何故かそうでもない。

また、人間以外の種族にやたらと知り合いが多い。合計すると人間の
知り合いより多かつたりする。

く2人目く

名前：サージャ・エリナシス

性別：女

種族：人間（父）と魔人（母）のハーフ

年齢：16

武器：薙刀（銘：『永遠^{スターチス}』）

→魔人が作ったものだから、決して朽ちない

見た目：肌は薄茶、灼眼、緋色の髪。身長は165cm位。整つ
た顔立ちだが、基本無表情。時たま見下したようにニヤツと笑う。

基本戦術：武器である薙刀を使うか、受け継いだ魔力（炎属性）を使う。

薙刀に魔力を込めることも可能。無感動にぎっくぎっく行ってしまうタイプなのでよく怒られる。

何事にも無感動なので、相手を痛めつけたり、精神攻撃吹っかけたり……しれつとやってしまう。

特殊能力：？魔力行使

母の血筋が高貴だったからそれなりに使える。代々伝わる秘技も練習済。

？透視
（シースル）

所謂千里眼。でも未来は見えない。ただ相手（物体でも、人間でも）の能力を一瞬で理解できる優れもの。

しかし基本的に自分の目的遂行のためにしか使わない（他人には教えない）。

経歴：ぶらりぶらぶらと世界中に散らばる、両親の『形見』を探して旅をしている。昔は快活な少女で器量よしとされていたが、15歳の時に魔人に母親を殺され（父親は既に他界）、現在では人に関心がない、あまり人と付き合わない根暗な性格へ。いつか母親殺しの魔人を殺してやろうと思ってる。

（3人目）

名前：ライト・カシオウス

性別：男

種族：人間（母）と魔人（父）のハーフ

年齢：16

武器：剣・刀（銘：日本刀「雷切」、魔剣「パラドックス」
盾「」）

魔剣「パラドックス」の特殊能力：世界を渡る力

隠された能力：一度だけ、時間を24時間
巻き戻すことができる【タイム・パラドックス】

もともと魔剣だったのだが、それに気付かなかったライトが、
さらに自分で魔力を付加。

普段は黄金に輝いているが、ライトがキレて、半魔人の力を使
うと、禍々しい赤紫色の光を纏う。

日本刀「雷切」は、雷に耐性が異常なほどあり、振るっただけ
で雷撃を切り飛ばすことが可能。

立花道雪が実際に使っていたもので、現代の日本に行ったライ
トが入手。帰還する。

見た目：短い金色の髪に赤色の瞳。長身で痩身。肌の色は白。
髪の色が変わる代わりに、母の死と自らの出生に関する真実を
知ったストレスで皮膚の色素が抜け
た。

所謂、アルビノ。ただし髪の毛だけは金色のまま。

基本戦術：剣と刀を使い分ける。敵が魔人だったり、固い鎧等
を身に着けていれば剣、普通の人間等

を相手にするなら刀を使う。

雷属性の魔法を使うことも可能。というより、他の属性の魔法はあまり使えない。

が、応用がかなり効いて、地面の中に含まれる鉄などを電磁石に変え、操ったりもできる。

電導性が一定以上ある、非生命体なら、自分を起点に半径5メートルの範囲で操れる。

しかし物凄く精神力を消耗するうえ、集中を切らすと一気に効果がなくなるので、あまり使わない。

普段は冷静沈着だが、最愛の母のことで何か言われたり、自業自得以外で大切な人（この場合は一

緒にいる仲間）を傷つけられたりするとキレる。

キレると意識が飛び、背中から深紅の翼が生え、髪の色が白に変わる。（魔人化）

そして敵を倒し終わると糸が切れたように失神し、母が殺された時の夢を見る。

特殊能力：？魔人化

上記のとおり。

？存在斬撃

世界や次元を渡る力を利用した斬撃が放てる。

敵の背後に一瞬で回りこんだり、敵と自分の距離を零にして攻撃したりとややチート。

が、基本的に人間相手には使わない。

平常時の魔人にはあまり効果がないため、トドメに使うこ

とが多い。

経歴：自分が十歳の誕生日を迎えた日に母親が何者かに殺され、近所のおばさんの家で育てられた。

が、十五歳になった時、自分の父親を名乗る魔人が現れ、自分の出生と母を殺した犯人について知る。その時は自分に力がなくて母の仇であった父親を殺すことができなかったため、復讐

を誓ったライトは、剣の修業を始める。

伝説の魔剣（一応彼の持つパラドックスのことだが、本人はまーったく気付いていない）が現

れたと聞き、それを手に入れるために旅に出る。

途中、一回父親と遭遇し、戦ったが負け、自分の持っていた剣が折れた後、剣を買う金もなく

働き口を探している間に、ボロボロのただの剣を手に入れるが、それが本当は伝説の魔剣だった

たというのに、気付かずに自分の魔力を込めて魔剣化する。

冷静沈着、というよりはもう冷たいといった方がしっくりくるような性格で、皮肉を飛ばすこ

とが多いが、実は優しい性格。

自分では復讐のために余計な感情は捨て、冷淡な性格になろうとしているが、上手くいって

ない。そのためか、自分の弱みを見せたり、慌てた状態や優しい性格など、自分の感情の動き

を見られるのが極端なまでに嫌い。

（4人目）

名前：ジェンナ・オパール・ヴァロウ

性別：女

種族：不明。（人間以外の血が混じっていることは確か）

年齢：16と本人はいうが、13〜14にしか見えない。

武器：碧く輝く魔剣（伸縮可能）

見た目：銀髪翠眼。髪は長いが、男装をしているため、帽子で隠している。

身長は155？程と小柄。絶壁ですw

基本戦術：魔剣は縮めておき、短剣のようにして持っている。

急に伸ばしたりして不意打ちする。

ヒールング
魔法は回復魔法や、光・音の魔法が得意。

ポーカーフェイスなので、先読みがされにくい。

性格：静か。というより話さない。表情も無いに等しいほど。思考回路は完全に女子なので、

ボロが出ないように無表情を保っている。本来は明るくて、優しいが軽くツンデレ。

女子の時と、男装している時では、別人のようになる。が、滅多に男装をとくことは無い。

人によって態度は特に変えたりはしない。別に誇り高いとか、そういうつもりは本人にはなく、

『金を持っているだけの奴にどうして頭を下げるんだ？』と、真面目に思っている。

一方、尊敬した人への敬意を払い方は、普通ではないほど。

特殊能力：？ポーカーフェイス…本気で表情を消すと、滅多なことでは先読みができなくなる。

これを破った人は、今までで一人。

？音探索^{エコロケーション}…元は一般的な魔法。戦闘中に使うことが多い。

一定の周波数の音を出し続け、跳ね返ってきた音で状況を把握する。

使い慣れすぎたので、ルーンを唱える必要がなくなつた。

特殊能力とは少し違つかもしれない。これのおかげで、ポーカーフェイスが強化されている。

経歴：旅の目的は本人さえ分かっていないらしい。ただ、旅を続けることが目的で旅をしている。

過去に女一人で旅をしていた為に事件に巻き込まれ、それが原因で男装をしている。

（5人目）

名前：レヴィオス・ヴェルベント（Revious Velbent）

性別：男

種族：本人は人間と公言しているが、真実は定かではない。

年齢：19

武器：雷の属性を宿した魔剣。

彼の魔力を増幅させる効果を持つ。

他にも能力があるらしいが、今の彼には使用できない。

彼にとってこの魔剣はただの武器ではなく、精神面で繋がっている。

但し、魔剣に人格はない。

銘は「クリード（信条）」

外見：身長は180弱

長めの濃い銀髪にコバルトブルーの瞳。

性格：普段は穏やかで比較的寡黙・冷静

初対面では近寄りがたい雰囲気だが、意外と親しみやすい。
仲間には絶対的な信頼を置く。

戦術：瞬発力を活かした剣によるスピーディーな攻撃が得意。

魔法（雷＆氷）も使う。

能力：？魔力加護

魔剣の加護により、簡単な魔法ならルーンの詠唱無しで

使用可能。

？自然治癒

高い治癒力を持ち、軽い傷なら常人を遥に凌ぐ速度で回復する。

？精霊召喚

契約した精霊を呼び出し、その力を行使できる。

しかし、媒体として魔石が必要。

精霊の強さは魔石の持つ魔力に比例する。

また、魔術師などが作り出す魔石より、

自然に生み出されたものの方が精霊と同調でき、

より強い力を発揮できる。

経歴：己の過去については全く語ろうとしない。

現在、傭兵行為をしながら各地を放蕩中。

～6人目～

名前：ルノーラ・ノア（愛称、ルノ）

性別：女

種族：人間

年齢：本人が覚えていないため、よく分からない。外見は、十八、十九くらい…

武器：白と黒の魔剣（銘はない。あってもどうせ覚えられないとも言っ）

見た目：純白の長髪（今のところ）に、タンポポ色の瞳。色白で、身長165センチくらい。

極度の寒がりなので、つねに厚着。魔法のかかったケープをいつも着用している。

基本戦術：炎系の魔法で豪快にゴオオオツと。魔法全般なんでもい

けるけど、周りの温度が下がるような魔法だけは使わない。本気になったときだけ、背中、双剣を抜く。剣を抜いても攻撃の豪快さは変わらない。

性格：とても明るくて人懐っこい。ルノの対人関係は、嫌いな人、友達、よく知らない人しかいない。ちなみに、友達、仲間も、そこらであつたおばさんも入る。全部平等。特にこの人が……って言う感情が分からない。（本人が気づかずに、分けていることはある）基本みんな名前呼び捨て。

特殊能力：？魔法

魔法はかなり得意で、何の魔法でも使える。十八番は炎系。使えば使うほどまくなる。攻　　撃方法は豪快、一気に広範囲に攻撃することが多い。でも、友達に巻き込まないように注意する。

？人格が入れ替わる。白と黒の魔剣と関係があつて、二つの性格を、それぞれ鋳で留めているような感じ。いつもは白人格だし、滅多なことで、黒人格は出てこない。キレたときだけ、黒人格に入れ替わり、攻撃力が増し、冷たく、凶暴になる。こうなったらかなな手がつけられない。敵が明白な場合、見境なく、殲滅しようとする。黒人格を続けると、だんだん髪が先から黒に染まってくる。白に戻ったときに黒い部分は切るから、髪の長さで、最近キレたかが大体分かる。

経歴：幼い頃に、何者かに両親を殺される。その記憶は、死ぬ間際に母がかけた魔法により、消滅したが、特別に人を思う感情を理解できなくなった。（本人はそのことを知らない）両親は、かなり魔法に精通した人物だったよう。ルノの過去を知らない人には、とても明るく、快活で、良い子だと言われているが、同時に、「あの暴

走っぷりが何とかなってくれたらねえ……」とも言われている。

第零話　～人物紹介～（後書き）

前書きで言ったことを守れなくてすみません。

初回はキャラ設定だから、まだ物語は始まってません。

次回からは、本格的にスタートすると思いますので、今一度、お待ちください。

一人目（男）

クラディー・ウェル（作中では基本『クラ』で統一）

備考：中二病と真ん中な設定の人。邪気眼だし。

二人目（男）

ライト・カシオウス

三人目（女）

サージャ・エリナシス

四人目（女）

ルノーラ・ノア（作中では基本『ルノ』で統一）

五人目（男）

レヴィオス・ヴェルベント（多分略される運命にある可哀そうな人。だって普通に読むと長いもん）

六人目

ジェンナ・オパール・ヴァロウ

第一話 動き出す虹・1人目（前書き）

さあ、始めましたRAINBOW。

トップバッターは僕こと久本誠一、代表作は『科学な都市の四方山話』（宣伝失礼！）、ここでのmyキャラはクラディー・ウェルです。

それでは、よろしくお願いします！！

第一話 動き出す虹・1人目

「おい、兄ちゃん！兄ちゃん！ほら見ろ、城壁が見えてきたぜ！」

「へ？・・・ああ、おはよーござ・・・」

「かーっ、まったくのんきに寝てる場合じゃねえっての！ほらほら、目的地が見えてきたぜ！」

ん、目的地？えーっど・・・ああーっ！！確かにこれは寝てる場合じゃない！

「も、目的地って言うともしかして！？」

「お、やっと目が覚めたか？ほら見ろ、あれがスパ^{ヨコ}バンドム大陸の中でも20本の指に入る大商業都市、ランギルってもんよ！どうだ、でけえだろ！」

いや、あんたは別にランギル^{あそこ}の出じゃないでしょーが。・・・

・そう思ったけど、まあそれは言わないでおいた。一応護衛^{タダ}ってだけで馬車に無料乗りさせて貰ってるワケだし、その負い目もちよつとはあるしね。僕が言うことじゃないけど、かれこれ5日間ただ馬車に乗ってるだけでほんとに報酬なんてもらっていいのかなあ・・・
・まあ、本家の傭兵さんにこんなこと言ったら『何甘つちよいこと言ってるんだ』って叱られるんだろうけど。

そんなことを考えながら左右に広がる森をなんとなく見回し・・・
・ん？今何か・・・動いたの・・・かな？

ふむ、どうやら終了間際で初仕事らしい。いつものように、精神^{しんしん}が落ち着いてくるのを感じる。

「あの、すみません」

「それでな、ここランギルを夜に見たときの夜景の綺麗さっていったらもう、それはそれは素晴らしいもので……ん？どうしたんだ、クラ？」

「ちょっと、護衛つてやつをやってきました。すぐ戻りますんで、先行っててもいいですよ」

「何！？……一体何が来た！？」

さすがにプロの商人。こんな事態も前に経験したことがあるんだろうか、気持ちを一瞬で切りかえられてる。

「えーっと……気配からいって魔獣ですね。ここらで暮らしてるんじゃないですか？」

「むう……そんな話はどこからも聞いてなかったが……とはいえ、まずは今どうするべきなのか……」

あれ？僕の存在意義って一体……？雇われた時は『護衛』だったはずんだけど……。

「あ、あのー？」

「ふうむ……」

なんか自分の世界に入っちゃった……。はあ、しょーがない勝手に行こつと。というわけで軽くジャンプして飛び降り、そのま

ま道を外れて森の中に。

さーで、どうするかな・・・殺しはあんまり好きじゃないからパ
ーっと追っ払えればいいんだけど、あんまりのんびりしているとあつ
ちに迷惑がかかるし・・・そもそも、相手は何なんだろ？

そんなことを考えていたら、いきなり横から雷が飛んできた。

「くっ・・・！？」

慌てて地面に転がって避ける。あ、危ない危ない・・・。で
も、今ので一つはつきりしたことがある。どうやら『魔獣の群れ』
ではなく『盗賊団』とかそんな感じの奴らに狙われているらしい。
やれやれ・・・ただ、今撃たれた雷のスピードや威力から考えて
も、はつきり言って実力はほぼ無いと見て間違いなさそうだ。多分、
生活に困った農民といったところだろう。

・・・あるいは、今のはただの威嚇射撃なのか。

うーん、どうしようか。とりあえず、誰が護衛している馬車に喧
嘩を売っているのか・・・それぐらいは、身をもって知っても
らおうか。それで逃げ出してくれば万々歳だし。となると、あの
魔法が一番いいかな。派手で目立つし。よし、次が来たらアレでい
ってやろうつと！

そのまま待つこと約5秒・・・来た！うーんと、さっきと
おんなじ雷の魔法、単発で第二陣は無い・・・よし！

「いくよっ！【効果移しの鏡】！」
エフェクトリック

言いながら雷の飛んでくる方向に腕を向け、魔力集中！――
―そして、伸ばした腕の先からこちらに向かって飛んでくる雷とま
ったく同じサイズの雷が飛び出し、そのまま2本の電気の束がぶつ
かり合って相殺して・・・どっちも消えた。大成功！

よし、相手の動揺が伝わってくる。もうちょつと心理的に追い込

んでやるか♪

「おーい、今ので勝ち目が無いのはわかったんじゃないの？でも、君も含めた全員で僕たちが通る間大人しくしてくれるって言うんなら、まだ見逃してもいいよ？・・・どうする？」

一瞬だけ沈黙した後、誰かが立ち去るような音がして。それで森は、静かになった。ふう・・・・護衛終了っ！

で、その後無事ランギルに入れて、依頼人から報酬を受け取り（ただし全額受け取るのはやっぱり気が引けたから、3割ほどおまけしておいた）、晴れて自由に！さーて、どこに行こうか・・・・たつて、まずは今日の宿を探さないとね。

10分後。道に行く現地の人から話を聞きまくり、総合的に一番よさそうな宿屋のドアをくぐって——その瞬間。
・・・あー、なんというか・・・すごいことになった。

第一話 動き出す虹・1人目（後書き）

くクラディー・ウエルの魔法メモ

エフェクトリック
？効果移しの鏡

相手の魔法とまったく同じ威力・展開力・スピード・効果を持つ魔法を放つ、徹底的な防御専用魔法。どんな魔法も必ず相殺できる半面、打ち消しの効果なので自分の攻撃には使えず、必然的に後出しとならざるを得ない。

さてさて、どうだったでしょうか。

じ、次回からはもっと文章力のある人が書きますから（汗）！

第二話 動き出す虹・2人目（前書き）

ども。真野優です。

二人目を執筆させていただくことになりました。

文才に欠けていますが、何卒よろしく願います。
では、ライト君の登場です！

第二話 動き出す虹・2人目

「……これで任務は終了だろう」

たった今、高電圧の雷撃で燃やした、荷馬車を後にして、少年はぽつりとつぶやいた。

もうそろそろ日没を迎えようとするランギル近くの草原には、焦げた草で形作られた丸いサークルが、複数くすぶっていた。

それを成した本人である少年の名前は、ライト・カシオウスという。

今彼が、ギルドから引き受けている任務は、『奴隷商人の侵入阻止』。

この時勢、どこに行っても、人が人を襲う光景は絶えない。

盗賊団は暴れまわり、戦争も必ずどこかで起こっていると言ってもいい。

そんな中、人を商売に利用することを思いついたのが、奴隷商人たちだ。

どんな仕事をしているのかは、言わなくてもわかるはずだ。

数分後、ふとライトは遠く先の方を向いた。

「チツ。また来たようだな」

遠くから鳴り響く馬蹄の音だけで、彼が奴隷商人たちを判別できるのは、特別な力があるから、等ではない。

商業都市、ランギルでは、荷物を運んで来る商人たちの、名前と来る周期、取引する品物の三つを、一人一人登録し、『紅印状』という許可証みたいなものを発行して、それを見せなければ中には入れないようにしている。

もちろんそれだけでは、偽装されてしまう可能性がなくもない。

奴隷商人が来るということは、近隣のどこかの村や国に被害者がいる。そういった情報を集める任務をギルドで依頼し、その結果をもとに到着時期を計算。算出された日時には、予め商人たちに「その日その時間帯には来ないように」と言っておくか、都市の中に滞在しておいてもらうことによって、その時に来るもの全てが奴隷商人等の、まっとうな商売をしない人間か、その日始めて商人としてランギルに来る、運の悪い人かのどちらかになる。

運の悪い人なら早々に諦めてもらうのか、というわけでもなく一応は積み荷をこっそり確認する、という作業を挟むことを依頼に含めておき、中身がまともな物なら通すようにしている。

閑話休題。

数分後、荷馬車の背後に回ったライトは、微風を起こして荷馬車の幌をはためかせる。

その中に見えたのは、おそらく「サイレント」の魔法をかけられ、意識を奪われているであろう、鎖に繋がれた人が十数人ほど、緩衝材のつもりなのであろう、わらの束。

これでは、声はもちろん、身じろぎした際にでるかすかな振動すらも、生じることはないだろう。

ライトでさえ、中身をあらかじめ知らされていなければ、感づく

ことすらできないかもしれない。

「制裁決定、だな」

姿を見られないよう、もう少し距離を取り、雷撃を発射すると、弾かれたように護衛の傭兵が荷馬車から飛びだして来るのが同時だった。

狙いが甘かった雷撃は、隙だらけの護衛が出てきたのとは反対の方向にずれてしまい、辺りの土を抉って、砂煙を巻き上げただけ。

「チッ」

すぐにこっちに向かって走ってくるものと思って身構えていたが、護衛の傭兵は、何故か森の方へ駆けて行った。

おそらく、彼が察知した気配というのは、ライトの相棒の魔獣、『スピカ』だろう。

ミニコン一角獣のスピカは、その気配を消すこともできるとはいえ、四六時中気配を消しているわけではない。

おそらく、タイミング悪く今、眠りについてしまったのだろう。

実力の分らない相手を、相棒の方に向かわせるのは危険だと判断したライトは、すぐさま牽制の雷撃を放つ。

さすがにそれが命中するほど甘い相手ではなく、予想通りかわされたが、動きを止めることには成功した。

「人の相棒に喧嘩を売った罪、しっかり償ってもらおうか」

そう言いつつも、自身の持つ最大火力ではなく、三分の一ほどに

加減した雷撃を放つ。

もつとも、雷魔法に特化した魔力を持つ彼の三分の一の雷撃は、普通に優秀な魔法使いの全力と等しいのだが。

そしてそれは、相対している傭兵が何かつぶやいたかと思うと、
「ベクトルが逆なだけの全く同じ雷撃」によって相殺された。

「なんだと！」

ライトの持つ魔法知識の中には、そんなまるで相殺するためだけにあるような魔法は存在しない。

彼が驚くのも無理はなかった。

直ちに最大火力を持つてして殲滅しようと、条件反射のように、
右手に魔力を集中させていく。

「おーい、今で勝ち目が無いのはわかったんじゃないの？でも、
君も含めた全員で僕たちが通る間大人しくしてくれてくれるって言うん
なら、まだ見逃してもいいよ？・・・どうする？」

そこそこプライドが高いと自負しているライトにとっては、相当
に屈辱的なセリフだが、相手に戦う気がないというのなら、無理に
森を消し飛ばしてまで撃退する必要もない。

それに今回の目的は、護衛の退治ではなく奴隷商人を抹殺すること。
と。任務には「ランギルに到着するまでに」という条件は入ってい
なかった。

こっそり後をつけて、護衛が別れた後で、奴隷たちの解放ついで
に始末しておけばいい。

ならば、とりあえずいったん立ち去るそぶりを見せた方がいいの
だろう、と荷馬車とは反対方向に走り出し、十秒ほどすると、今度

は足音を立てずに、こっそりと接近する。

もし積み荷のことも知っていて、「あの少年」が犯罪の片棒を担いでいるというのなら容赦はしないが、おそらくそうではあるまい。

城があるわけでもないランギルには、当然家来や臣下という立場の存在もないわけで、門番が務まるほどの技量の持ち主は、傭兵だけで賄われていた。

そして、だいたいの傭兵がそんなつまらない任務を嫌がるため、御多分に漏れず、門番に誰何されることもなく、ランギル内へと到達した荷馬車から、まだ10代後半になったばかりというような少年が降りてきたのを確認したライトは、彼が遠ざかっていくと同時に、荷馬車に跳び乗った。

幌をくぐって、中に入ると、「デイスヘル解呪」を発動して、掛けられていたサイレントの魔法を解き、人を起こすのにはちょうどいい程度の水をそれぞれの奴隷たちにぶつける。

雷に特化したライトの魔法は、火や水、風、土、光や闇といった属性の技があまり使えない。

多分全力で放つても、さっきの少年の十分の一以下の出力しかないだろう。

ただ、訳あって、彼は詠唱なしで魔法を発動できるため、そのタイムラグのなさと、剣技、雷の三つを持って、EとSのうちの、S級傭兵として知られている。

「静かに。ここから動かないで。貴方達を捕まえた男がいなくなつてから、外に出て待っておいってください。ギルドに案内しますから」

ライトは捕まえられていた人々が頷くを見て、ひらりと外に跳んだ。

そしてほぼ同じタイミングで、いかつい顔の商人が飛び降りてきた。

「ほーう。貴様、何をしたかわーってるんだろっな？ ああ？」

「臭いから息をするな、屑」

すごい商人を一瞥したライトは、鼻をつまんで挑発する。

面白いようにこめかみに血管を浮かべた商人が、腰から太い剣を抜く。

「それでも俺は一応、剣も魔法も使えるんだぜ。貴様みたいなひよっこ、ひとひねりにしてくれらあっ！」

さすがに言うだけあって、そこらの一般兵士よりは早い踏み込みと鋭い斬撃。しかも、魔法障壁で身体と武器を覆っているところから見ると、本当に、奴隷商人にしておくには惜しい腕の持ち主だった。

とはいえ、手加減をしてやられてやるほど、ライトは甘ったるい人間ではない。

ライトが鞘から抜いたのは、彼が使う雷撃と同じで、青白く光り輝く、魔剣。

魔法障壁で覆っていたはずなのに、すっぱり切断された自らの剣とライトの魔剣を交互に見て、啞然とする商人だが、その隙が文字通り命取りとなった。

「そこで消し炭になつてろ！」

彼が最後に見たものは、自らの首をはね飛ばす魔剣の軌跡と、轟音を伴って天から降ってくる極太の雷だった。

その後、無事に奴隷たちを解放し、任務終了の報告をすませたライトは、もらった給料を財布にしまい、普段から使っている宿に向かおう……とした。

のだが、あれだけの轟音を発生させてしまった自業自得というか、なんというか、辺りから湧いてくる野次馬の中の、傭兵と思しき中年男たちに捕まって、近くの宿に連れ込まれてしまった。

「坊主、やるなあ！ たまたま外を歩いて目撃したんだが、ありや魔剣だろ？ しかもあんな短い呪文であれだけの雷を発生させるなあ、もしかして坊主、『雷帝』か？」

ジョッキに注がれたビールを丁重に断り、その上顔を思い切りしかめていたにもかかわらず、傭兵たちに囲まれたライトは、諦めたように溜息をついて言った。

「……一応、ギルドから与えられた二つ名だとそうなっているな」

ライトが言った途端、さらに騒がしくなる気の良い傭兵たち。

ただ、もうお約束というかなんというか、女将の鶴の一声によって、大人しくなる彼らは、見えて笑いを誘うのだが、ライトの仏頂面は消えなかった。

「すみませーん、今晚ここに泊めてほしいんですが」

ふとその時、聞き覚えのある声が出て、思わずライトは宿の入口の方を振りかえった。

「お前は、さっきの！」

運命の齒車は、ゆっくりと回り始めたようだ。

第二話 動き出す虹・2人目（後書き）

いかがだったでしょうか。

説明チックな文章になってしまっただけ申し訳ありませんでした。

こゝ、今度こそ次は文才のある方の担当になりますので、見捨てずに明日の更新をお待ちください。

第三話 動き出す虹・3人目（前書き）

3話目を担当させていただくことになりました、玖龍です。

私のキャラクターは「サージャ・エリナシス」です。

駄文しか書けませんが、未永くお付き合いいただけたらと思います。

それではよろしく願いますm（・・）m

第三話 動き出す虹・3人目

所変わって南国カディム。

この大陸のどこよりも早く夏を迎えた明るい国。

活気づいた街、涼を取り入れた街。

人々はそんな国の様子を具現したかのように陽気で、観光客は皆一様に言う——カディムはいいところだ、と。

そんな国の片隅。

暗く、魔獣が住んでいそうな森で一人の少女が大柄の男2人に絡まれていた。

男たちが好色な目で見ている、少女の姿は異様だった。なんというか……人間のそれではなかった。

髪は緋色、合わせたような灼眼。肌は褐色……この国でもあまり見ない（特に髪と眼の色）組み合わせだった。

「兄貴、こいつどうします？」

狐のような顔をした男が言った。

するともう一人の野獣を思わせる姿の方は笑った。

「こらこらザレス。淑女^{レディー}には優しくするものだよ。……お嬢さん、こんな暗い所を一人で歩いてはいけないよ。お困りでしたら俺等が助けませう？」

にやにやとした笑いを顔に張り付かせ、問題の少女を見下ろす。

しかし少女の方は全く相手にしていなかった。寧ろ、男2人を空気に以下の存在として見ていた。

慌てる様子もなく、ただ邪魔な壁を避けて歩こうとした……が、止められた。

「この先に進もうってかい？なら俺ん家寄っていけよ……悪いよ
うにはしないからさあ！！」

「！」

突然野獣の方が少女の手首を掴むと、開いた方の手で口を塞いで
しまった。

「あっはっは！俺様が大切にかわいがってやるよ！！あっはっは
！！」

『呑み込め』

少女が手のひらの下でそう呟くと、男の手が火に包まれた。

「あっつ！！な、なんだ！？」

喚きながら男が急いで手を離れた隙に少女は男たちから逃れた。
そのまま通りすぎようとすると、狐男が叫んだ。

「おい、女！！なにしてんだ！！早くこの火を消せっ！！」
しかし無視。

それにム力ついたのか、狐男が追ってきた。

「テメー、女だからって容赦はし……いいいい！！？」

自分の肩にかけられたその手を掴み、自分より3倍はあるうかと
いう巨軀を思いっきり背負い投げをする。

信じられない力で投げ飛ばされた男は、呻くのも忘れ、ただぽか
んとしたまま地面に横たわっていた。

それを見て、指をパチンと鳴らす。

すると野獣の手を蹂躪していた火が姿を消した。
もちろん火傷の跡はない。

「な、なんだ……？」

「魔法よ」

初めて少女は口を開いた。

「ま、魔法ってことは……そうか。そうだっ！！これならお前の変な見た目も、あの馬鹿力も説明できるっ！！お前は……人間じゃねえなっ！！」

得意そうな顔を見ると、ビシッと人差し指を少女の方へ立てた。

「お前は……」

「その先を言ったら……こうよ」

長い指で首の前の空気を切る……つまり首がなくなる、ということだ。

それをこけおどしと取ったのか、男はせせら笑った。

「はっ、バカも休み休み言いやがれ！お前にゃ無理だ！……ザレスごときを倒したぐらいで図に乗るなよ」

「……」

男を飽きたように見る、無言で。そして前屈姿勢を取ると、そのまま飛びかかるとした。

しかし飛びかかることはなかった。

はっとしたように横の森を見ると、そのまま臨戦態勢を解き、足早に立ち去ろうとした。

「ま、待てっ！」

「そうね……骨ぐらいもらっていいこうかしら」

「へ？」

そう言々と少女は男の方に肉薄すると、ぶっとい腕を掴んで少し力を加えた。

すると鈍い音を立てて、腕は変な方向に曲がってしまった。

「な、なにするっ……痛い！」

その声を聞くと、何か汚らわしいものを触ってしまったというように腕を離すと、男の耳元に囁いた。

「あなたたちは喧嘩したのよ……私のことを言えば、あなた、ほんとに首取れるわよ」

そう言うつと男を突き飛ばして、その場から走り去った。

「誰かが私を見てた」

憎々しげにそう呟くと、先ほどの少女は森へと入って行く。

気配と辿ればいずれ見つかるだろう。

先ほどのことを口止めさせなければ……自分の存在は危ういものとなるだろう。

ぎゅっと手のひらを握り、ずんずんとおくびもなく森を進む。

「サージャ……あなたにはまだやることがあるわ……見つかるわけにはいかないの」

目の色をさらに強い紅に変え、少女——サージャは名も知らぬ、顔も見ぬ目撃者を探すこととなった。

第三話 動き出す虹・3人目（後書き）

└サージャの魔法メモ┘

？「呑み込め」

そのまんまです。

サージャは人物紹介でも書きました通り炎系魔法行使者です。
今回は「呑み込め」でしたが、炎を行使し敵を攻撃します。

「呑み込め」は所謂コード、ルーンみたいなものです。

私以外は素晴らしい筆力を持っていらっしゃるので、よろしく願
いしますm（- -）m

第四話 動き出す虹・4人目（前書き）

四人目を担当します、星羅です。

私の子はルノーラ・ノア。愛称ルノです。魔法使いで、極度の寒がりです。

あんまり上手い文章は書けませんが、これからよろしく願います。

第四話 動き出す虹・4人目

南国カディム、場所を若干移動して、森の外れ――

「あれえ？なんでサージャ帰ってこないんだろう？」

南国の夏だというのに超厚着の少女――ルノは森の入り口にある大樹の下で待ちぼうけをしていた。

まあ、待ちぼうけとは行っても、ちよろちよる遊びに来る小動物たちの相手をしていたので全然暇ではなかったのだが。

ルノ曰く友達（本人がどう思っているかを気にしたことはない）である、同居人、サージャ・エリナシスが「森に行ってくる」と言い残して出て行ってから早3時間。

いい加減戻っていても良い頃だと思って見に来たのだが、ちつとも帰ってこない。

ふと、小鳥が飛んできてルノの束ねた真っ白い髪を引っ張った。

「痛い痛い、なにすんのさ、ちよつとやめてー」

タンポポ色の大きな目がだんだん涙目になってくる。

それでも小鳥はパニツクに陥ったように、ルノの髪を加えて森の奥へ引っ張ろうとする。

「オツケーオツケー、分かった行くよ、だから一回私の髪はなしでね。で、何があったか教えて？」

そいうと、小鳥は、まるでこちらの言葉を理解したかのようにルノの髪を放した。

「じゃあねー……あ、これがいいや」万霊の葉「リーナ・トラー」

ルノが手をかざして呟くと、小鳥に淡い光が宿り……、なんとしゃべりだした。

「ルノ、タイヘン、サージャ、キツネ、ヒ、ヤジュウ、ホネオツタ。」

「あー、なになに？サージャと狐と野獣？狩りしてるのかな？」

「チガウ、サージャ、ニンゲン、タベナイヨネ？」

「え、ちよつと待って、今人間何人出てきた？」

「サン。サージャとキツネとヤジユウ。」

「ああ、分かった！狐と野獣が、サージャを襲おうとしたんだ！盗賊かな？」

「ソコマデワカンナイ。」

小鳥は首を傾ける仕草をした。

「ま、どっちにしる身の程知らずにもほどがあるよねー。ま、いや、今サージャ何処にいるの？」

「ドツカイツチャツタ。ナンカ、サガシテルミタイダツタ」

「そつか、じゃあサージャはルノが捜してみるね。ありがと、ばいばーい。」

小鳥に手を振ると、ルノは森の奥へ走っていった。

「キラツケテ」

背後から小鳥の声が聞こえる。あの小鳥もじきに元に戻るだろう。

約十五分後…

先ほどまで森の奥で、目撃者の捜索に神経を集中させていたサージャは、森のそこかしこから聞こえてくる、自分の名前の連呼に、激しい頭痛とめまいを覚えていた。

よくもまあ、森の中をあれだけの速さで移動するものだと、若干の感心も覚えるが、今はただ迷惑なだけである。

無視して、捜索を続けるか、捕まえてやめさせるか迷ったが、結局、目撃者はサージャが自分の名前だと知らないわけだし、焦ってしつぽを出せば逆に好都合だと思ったので放っておくことに。したのだが……

「サージャはっけーん！」

底抜けに明るい声が空から振ってくる。

わざわざ上を向かなくても分かる、ルノだ。

対魔法製ケーブ（自称）をふくらませながら飛び降りて来た。

「あのねサージャ、聞いてっ！」

「今忙しいわ」

「ルノね、チョコレートケーキ焼いたの！」

「いらない」

「でね、チョコレートとお砂糖が、ちょっと足りなかったの。だから、見た目似てるしいいかなって、思って、カレールーとお塩入れたのよ。良い感じにできたよ。たべて！」

「激しくいらない。有害物質は自分で処理して」

「晩ご飯いらないの？ ケーキしか用意してないよ？」

「……（人の邪魔してないでとつと帰ってまともなもん作れやという視線）」

にらまれても、ニコニコと笑っているルノを見て、サージャの奇立ちは50%増量される。

さっさと追い返そうと、口を開いたそのとき……

ガササツ

茂みが揺れ、体長三メートルはあろうかという巨大な熊が現れた。それを見た二人は……

「ねえサージャ、ケーキがイヤなら晩ご飯これでいい？」

「有害物質よりは。ていうかこれ、街で噂になってた“人食い”じゃない？」

「んじゃ、退治します！」

怖がるとか、なんとか、そういう感情は皆無だった……。

サージャとしては、これ以上騒ぎを起こして欲しくないという思いもあつたのだが、

もしまだ目撃者が近くににいるなら、絶対にしつぱを出す。そんな確信もあつた。

結局のところ、これだけ張り切ってるルノは気絶でもさせない限り止められないので、ここは賭けるしかなかった。

「ここんとこ寒い日が続いておりますので（どこが）張り切って、景気よくいきましょー、焦げはガンのもとなので、今回は、詠唱なしてまいります」

「はやくして」

「……はい。じゃ、いつきまーす！ “ファイア・天竜の焰レイズ・クラーム”！！」

手前に掲げたルノの手のひらから、とんでもない大きさの炎が吹き出して、一気に巨大熊とそのまわりの木々を飲み込んだ。

「そろそろ焼けたかな」

「早く火けさないと炭になるわよ」

「ちよつとそれ早く言つて」

ルノが慌てて火を消すと、例の熊は黒こげに、木があつたところ
は…

そこだけぽっかりと丸く、焼け野原になっていた。

「いやー、だいぶ暖かくなったね。ちよつと焦げすぎ…で、さ、

サージャ？」

ルノは、茂みの奥を見つめたまま、硬直したように動かないサージャを見て、驚く。

——いつもなら、ここで、「やりすぎ」とか、「…ハア」とか言ってくれるはずなのに…

「見つけた、間違いない」

「サージャどうし…」

「ルノ、帰つて」

そういつてサージャは走っていつてしまった。

そして、この状況で、おとなしく帰るルノではない。

「まって、サージャ、ちよつと、なに…」

走って追いかけて、すぐに追いつく。幸い、遠くへは行っていないかった。

追いついたサージヤはただ、何かを冷たい目で見下ろしている。
ルノも、サージヤの影から、それをのぞき込んで…
「え？」

第四話 動き出す虹・4人目（後書き）

（ルノの魔法メモ）

？リーナ・トローラー

本文を見ていただければ大体分かりますが、生物と話ができるようになる魔法です。あまり複雑な言葉は話せないのと、持続時間の短さが欠点。

？ファイ・レイズ・クرائم

ルノの十八番。炎系の魔法です。本当は発動前に、呪文の詠唱があるのですが、魔力の量に物言わせて、飛ばしてるようです。ただし、細かいコントロールができない模様。

あ、そういえば、ルビ振ってありますが、ああいつてるわけではなく、意味…って感じかな。ちゃんと、カタカナ叫んでます（笑）

第五話 動き出す虹・5人目（前書き）

次は俺、銀煌輝しろがねしきが担当します。

まず始めに投稿が遅れたことについて深くお詫びします。

本当にすみませんでした。不覚にも風邪をこじらせてしまいました
て……

まだ半人前にも満たないような稚拙な文章ですが、お付き合い
頂ければ幸いです。

よろしく願います。

第五話 動き出す虹・5人目

「失礼する。この家にカリウスはいるか？」

彼は家の前で掃除をしている妙齡の女性に話し掛けた。

「えっと……兄の知り合いですか？ わざわざ来て下さったところを申し訳ないのですが、兄は約半年前にランギルという商業都市に移りました」

「……何！？」

その言葉を聞いて彼——レヴィオスは驚いた。

彼はここに住む友人に会いに来たのだが、友人はどうやら引越してしまっただようのだ。

（ここからだとして2、3日ほどだろうか。かなり遠いな……）

レヴィオスはあるきつかけで友人の命を助け、腹を割って話せるほど親しくなった。

そんな友をわざわざ訪ねた彼にとって、親友の転居は意外だった。しかし彼がそれを知ることにはほぼ不可能だっただろう。

各地を飛び回るように傭兵稼業をしている彼は一所に留まらないため連絡を取るのには至難の業だ。仮に遣いを出したとしても、会えることは極めて稀だ。

友人はその歳の割には凄腕の情報屋で、彼も度々友人に世話になっていた。今回の訪問も依頼に加えて、長らく顔を見せていないのを心配させないためだ。

「そうか、分かった。それでは」

そう言って立ち去ろうとしたレヴィオスを女性が呼び止めた。

「もしかしてあなたはレヴィオスさんですか？」

「……そうだが？」

「では、少しお待ち下さい。兄から手紙を渡すよう言付かっていますので」

そついうと彼女は家の中に入つて行き、封筒を手に戻つてきた。

「これをどうぞ」

レヴィオスはそれを受け取り、手紙を開いた。

「なるほど……」

手紙を読んで彼は微かに笑みを浮かべた。

（なんともアイツらしいな）

手紙を読み終えた頃、女性が話し掛けて来た。

「あの……、兄の所へ行くのでしたら、1つ言伝をお願いしても良いですか？」

「何だ？」

「遠いけどたまには帰つて来てね、とお伝えしておいて下さい」

女性は微笑んでそう言った。

「ああ、了解した」

彼は応え、こう続けた。

「俺はもうここを発つ。世話になつたな」

背を向けて歩き出す。

「はい。お気を付けて！」

彼は振り向かず、軽く手を挙げて応えた。

そして彼は商業都市への近道である細い山道へと入つて行つた。

山道をランギルへと向かう彼に邪魔が入つた。

ばらばらと男達が現れ始めて彼を取り囲んだのだ。人数は10人程だろうか。

「何用だ？」

取り乱すこともなく彼が問うと、男達は下品に笑い出した。

「俺達に用があるのは荷物だけだぜ？ お前に用はない」

「……愚かだな」

彼は吐き捨てるように言った。

「何だと？ もう1回言つてみる！」

彼の言葉に男達が反応する。

「何度でも言おう。相手の力量も計れないような貴様らは愚かだと」彼の鋭い眼光に男達は気圧され、少し後退った。が、

「相手はたった1人だ、行くぞ!」

彼らのうちの1人が叫ぶ。その怒号が合図かのように襲いかかってきた。

振り下ろされる斧を最小限の動きで避けつつ、突き出された剣を自らの魔剣で弾く。

「弱いな」

一言呟き、体勢が崩れた相手に蹴りを放つ。

その刹那、軽業師のように後方へ大きく跳躍。彼らの全員を視界に捕捉する。

「何だと!?!」

男達が驚愕の表情でこちらを見る。

「俺に闘いを挑んだこと、身をもって後悔するがいい!」

彼はその隙に叫ぶと剣を彼らに向けた。

「行け!」

この叱声の直後、眩い閃光が辺りに迸る。

「な、何だ!?!」

「助けてくれえ!」

「くっ、やられた……」

光が収まると男達が地を転げ回り、悲鳴を上げていた。

「ただの目眩でした。数日も経てば元通りになるだろう」

彼はそう言々と男達の武器を集め、遠くへ放り投げた。

「思わぬ時間を使ってしまった……」

そして彼は平然とその場を去って行った。

第五話 動き出す虹・5人目（後書き）

いかがでしたか？

文章力はありませんが、精一杯書きますのでこれからもどうぞよろしく願います。

お時間ありましたら、各々で投稿している小説の方もどうぞ。それでは、次回もお楽しみに！

第六話 動き出す虹・6人目（前書き）

雨音ジエンナ（現 つなまよ）です。拙い文章ですが、最後までお付き合ひ頂けると幸いです。

第六話 動き出す虹・6人目

此処は、スパンダム大陸の西の端にあるセイレーン海岸。ボクはそこで一人、彫像のように佇んでいた。別に深い意味があるわけではないが、ひたすらに夕日を浴びて佇んでいた。魚が跳ねて、海面が泡立つ。それを見てボクは溜息をつき、

「お腹……減ったな。」

呟いた。普段はこれくらいの事を声に出すことはないが、今は人がいないから別だ。しばらく前までは、海の中の魚を捕まえようと、あの手この手を試していた。でも、一向に捕まえることができず、いい加減疲れ果てて（主に精神的に）、『あー、海っておっきいなー。』とか思いながら佇んでいた。どうでもいいけど、魚に遊ばれてる気がする。竿の一本でも持つてりゃよかった。なんて延々と考え続けて1時間。もう、夕日すら沈んできている。あと数分もしないうちに辺りは真っ暗になるだろう。

「あと一回だけ。。。」

こんなところでじっとしているのも、いい加減嫌になって来ていたところだし。少しは建設的なこともしないと！ということで、腰から碧いオーラを放つ短剣を抜き放った。このオーラを見ると、少し嬉しくなった。いつでも、こいつだけは一緒だって。あ、でも表情は一緒だと思うけど。ずっとぼーっとしてるみたいな顔だから。わざとそうしてるし。それはともかく、その短剣を海に向けて構えて、エコーケーション音探知で魚の多そうな所を探る。ここって決めた場所に短剣を向けて。

「……伸びろ。」

ぼそつと呟く。短剣の先が海に吸い込まれて。何故か『ガツンっ』
って衝撃を受けた。石にでも当たったか？と思って伸びて普通の長
剣サイズになった愛剣を短く戻していく。欠けてたらやだなー（魔
剣なんでまず欠けないけど）、と思って剣先を見るとガラスの小瓶
みたいなものが刺さっているのに気付いた。なんでガラスの小瓶が
刺さっているのか？という疑問は無視してとりあえず魚じゃなかつ
たことに怒ってみる。ひとしきり『……いらっ』としたところで
小瓶の中身を確認。（驚くべきところに、剣を抜いても小瓶は壊れず、
表面はどこを見ても滑らかだった）中には、

？これを拾った人は、商業都市ランギルの【あかきナイト紅き騎士クプリウス亭】
の店主に渡してください。近くに馬に乗った騎士の像があると思い
ます。それを目印にしてください？

と書かれた紙と、ところどころ黒ずんでいる銀の鎖のペンダントが
入っていた。ってか、紅き騎士なんて仰々肩書きのくせに名前がク
プリウスって微妙。とかいうツツコミを心の中でいれながら、そう
いえば魚を捕ろうとしていたことを思い出してへこむ。魚の代わり
に厄介なもの拾ってしまった。すでに辺りは真っ暗なので、野営地
に戻らなければいけない。今日も携帯食料が……。と、更にテン
ションだだ下がりです。てくてく歩く。

歩いて野営地の近くまで行くと、先の方に人の気配がした。それ
も大勢。殺気や、気配を隠そうとしている様子はないので、野営し
ているようだ。多分野営地とられた。今日はついてない。それでも
一応確認しようと思って、ゆっくり近づいた。気配は消さない。気
配を消していたら、相手に気づかれた時に面倒だからだ。良い人そ
うな商人さんなら、ごはん分けてくれないかな♪とかいう下心も無
いわけじゃないし、第一印象は良いに限る。

野営地は、森の中の広場。かなり大きいし、整備された道につながっているから、馬車で乗り入れることもできる。広場の中には、12人ほどいるのが見えた。多分、商人。しかも晩御飯中。ラッキ― そのうちの数人（護衛？）がボクのいる方を警戒している。ボクはそこへ無警戒に近づいた。広場に足を踏み入れた瞬間、相手に緊張が走ったが、ボクが一人で、しかも子供だと分かるとほっとした表情を一樣に浮かべた。うーん。ボクが本気で襲うつもりだったら、全然楽勝だと思うのになー。とか思ったけど、まあ、その点は置いておいて。

「何者だ？」

と相手方からの誰何の声。ボクはただ、

「旅人。」

とだけ答える。

「なぜここに来た？」

「野営地。」

「ここは、君の野営地だったのかい？」

別の人（多分この人が主）が声をかけてきた。ぼくはただ頷くだけ。

「うーん。ごめんねえ。でも、私たちも立ち退く訳にはいかなくてねえ。」

また頷く。

「君は夕飯をもう食べたかい？」

よっしゃあつ！！きたー！！！！という内心は全く顔に出さず首を横に振る。

「お詫びと言つてはなんだけど、私の晚餐に招待されてくれないかな？」

はいっ！！！！って感じだったが、やはり頷くに留めた。

招待されてみたものの、奴隷商人とかで一服盛られたりするとシャレにならないので、そのへんは注意。しかし、話しているうちに一行は塩の商人らしい、と分かった。多分安心。そして、ランギルに向かっていると聞いて。今日のボクすつごくついてるくね？と本気で思った。

食後。ボクは首尾よく護衛としてこの商団についていく話をまとめた。これで寝る場所も確保。明日から、ランギルに向けて出発することになった。

第六話 動き出す虹・6人目（後書き）

よく分からなかった点もあるかも知れませんが……。
他の方はもっと文章力ありますんで。次話も読んでくださいね♪

第七話 逃げ？これは作戦です、ハイ（前書き）

どーも♪私こそ七人目……ではなく、なんと初めに戻って久本です。

何故七人目ではないのか、まあ、それについては……ちょっとしたごたごたがあったりするわけでして。

しばらくは上の六人で回していくことになると思いますが、どうぞご了承ください。

それではクラディー・ウェルによる第七話、どうぞ。

第七話 逃げ？これは作戦です、ハイ

「すみませーん、今晚ここに泊めてほしいんですが」

あゝ……結構混んでるなあ……部屋、空いてるかなあ？

そんなことを考えていると、脇のテーブルからいきなり、

「お前は、さっきの！」

怒鳴られた。てか誰？あのやたらと怖い顔でいらっしやる人はどこのどちらさんですか？

「おう、てめえかその用心棒ってのは！」

「見ててくれ、こんなガキはアンタが手出しするまでもねえぜ！」

「だから誰ー！！？」

いや、ホントに覚えがないからね！？あ、もう威勢よく立ちあがった方の筋肉馬鹿A＆B（仮名）なんてやる気満々だし。わ、こっち来た。あの人たち、『人の迷惑』って言葉知ってるのかな？それとも、単に酔っぱらってるだけとか？ただ、どっちにしろ――

「オラ、覚悟し――グブッ！！！！？」

「テ、テメエいま何しやがっ――うおわっ！！！！？」

——どっちにしろ、売られたケンカは買っとくけどね。ちなみに今やったのは、Aのほうに肘鉄を軽く喰らわせて、その勢いで同じ方向にいたBの胸ぐらをつかんでから背負い投げの要領で床に叩きつけただけ。とはいえ、完全にノビちゃってるのを見ると少しやり過ぎたかもしれないかも……。まあ、骨は折ってないはずだからいいと思うけど、ね。

「良かった～……。んじゃ改めて、部屋空いてますか？」

さ、今度こそ何もないだろうね。明日も色々やりたい事あるし、今日は早めに寝ようかな。。。。。

「お前。。。。！」

あ、そっぴやまだ本命が残ってたんだ。うわー忘れてた！

「ごめんごめん。許してねっ！」

「は？。。。。まあいい、さっきの借りは返させてもらっぞ」

「ん？やっぱり知り合い。。。。だったかなっ？」

あ、なんか怒った。どうも聞いちゃいけないことを聞いちゃったらしいけど。。。。何がまずかったんだろ？

「ちょ、ちょっと待って待って！やっぱりホラ、こんな所で喧嘩したら店の人に迷惑だよ！？女将さんなんかすごい顔してこっち見てるし！うわ、煙出してるフライパンなんか構えないで！！ソレ絶対危ないって！！」

「・・・・・・・・なら、外に出るか？」

「えゝ、だってもう夜で暗いしさ、お腹減ったからやだ・・・・・・・・
・なんて言うわけないでしょ！じゃあ今から外行こっか！！だから落ちていて！」

怖い！この人目が怖いよ！！はあ・・・。

ゝ五分後ゝ

「で、何でまた急に喧嘩なんて吹っ掛ける気になったの？暴力沙汰はあんま好きじゃないんだけど」

「とぼけるな。仮にお前が何も知らなかったとしても、話ぐらいは聞かせて貰うからな」

「・・・・・・・・ごめん、いま会話のキャッチボールが出来てなかったような気がするの、は気のせい？」

「・・・・・・・・ツ！！」

おっ、と・・・・・・・・！呪文抜きでいきなり飛んできた雷を見た瞬間、一発でピンときた。この人・・・・・・・・！まあ、とりあえず防御か。
フォーティテュード
片刃の愛刀を抜き、まっすぐ飛んでくるソレをまっすぐ切るような感覚で刀身を叩きつける！

バシューウウウウウ！！！！

何かから空気が抜けるような小気味いい音と共に、剣に吸い込まれる雷。

「何!？」

ははっ、驚いてる。まあ無理もないか。いまだに使い手の僕も仕組みがさっぱり分からない、魔法吸収の効果を持つ魔剣――

――
《不屈》
――
フォーティテュード

「無駄だよ、僕に魔法は効かないから」

少なくともこれがあれば、けどね。

「そうか、なら魔法は使わない。素手でやるまでだ」

残念……。なかなか切り替えの早いタイプらしい。うん、実際の人は強い。身のこなしを見てる限りでは体術も相当使えそうだし、真正面からぶつかりたいとは思わない。ここは一つお得意の手で、お茶を濁して終わらせてやるとしますか。

「しょうがないな……。必殺」

「ん？」

「――天空切りッ!」

言いざまに相手に近づき、それと同時に剣を振り上げる。その『剣を振り上げる』という動きと、何より寸前に聞いた『天空切り』という名前そのものにつられ、ほんの僅かに注意が上半身に集中す

る。そしてそこからの――

「でやつ!!喰らえローキック!!」

「ぐッ!?!」

正確に向う脛を蹴り飛ばすっ!痛みで一瞬ひるんだ所をそのまま、

「へへっ!それじゃね〜!」

手早く逃げ出した。後のこと?そんなの知りません。

〜10分後〜

ふう・・・もう逃げ切れたかな?全く、ずいぶん遠くまで来ちゃったよ。結局、今日はどうしよう?さっきの所まで戻って泊まり直してもいいけど、まだいるかもしれないし、同じ手は効かないだろうし・・・。

と、そこで一つ看板を見つけた。赤く光るランタンと、その脇に大きく書かれた『紅き騎士クプリユス』の文字。何というか・・・・・・こう・・・ネーミングセンスが微妙に間違ってますよクプリユス(仮名)さん・・・。

とはいえ、こんなところで酒場が見つかったのも何かの縁かもしれない。泊めてくれるか聞いてみよっつと

カランコロン♪

「いらっしゃいませ」

外見とは違って、中は予想外にすつきりして落ち着いた雰囲気だった。マスターに質問した瞬間、一人だけいた客が振り返った。

「えっと、すみません。今晚だけでも泊めてくれませんか・・・
つてあれ！！？な、何で君がここにいるの！！？」

「また貴様か！」

そこにいたのは、ついさっき足蹴り飛ばしてほったらかしといった少年だった。うう・・・こんなオチがあるなら入らなきゃよかった！

第七話 逃げ？これは作戦です、ハイ（後書き）

どうだったでしょうか。念のため補足すると、クラ君だって毎回あんな事ばっかやってるわけじゃありません。今回はたまたまですって、ね！

第八話 不吉な予感（前書き）

どうも、またまた七人目ではなく、今度は真野優です。

諸事情により七人目の登場は遅れることとなりそうですが、それまでは六人で回していくことになります。

では、第八話どうぞ！

第八話 不吉な予感

あんなにイライラする戦いは初めてだ……っ！

正直に言おう、あれは自分の完全な不注意だった。

まさかあれほどあざとい手を使って来られるとは思ってもみなかった。

あの護衛の少年、なかなかやる。以前魔法を打ち消した上、今度はどうやら吸収されたらしい。

しかもタイムラグほぼなしで放った雷撃を防ぐだけの反応速度……相当高ランクの傭兵か何かだろう。

ふと、物音がして顔を上げると、そこには先ほど自分に蹴りを当てて逃走していった少年の姿が。

「またお前かつ！」

思わず手が刀に伸びる。下手に魔剣を使つと、剣に溜められた魔力まで持つて行かれかねない。

ならば、最強の剣という説もある刀を使った方が得策。

「失礼ですがお客様、店内で暴れますと他のお客様のご迷惑となりますので……」

「……他に客なんてあいつしかいないだろう」

つい口からツッコミが漏れてしまったとはいえ、意識はずっと少年に向けたまま。

「さて、名前ぐらいは聞かせてもらおうか」

「では言おう、我は天地創造の神である」

「嘘つけ」

「……はいはい、つまんないの。えっと、僕の名前はクラディ
ー・ウエル。たださ、普通は自分から名乗るものだと思うけど」

「俺か？偽名でよければいくらでも教えるが」

そんな些事は今は別にどうでもいい。

「単刀直入に聞かせてもらおう。お前はあの荷馬車が何を運んでい
たのか知ってるのか？」

——もしこの質問の答えがY e sなら、問答無用の全力であいつを
殺す。

そう心の中で決めていた。

「ん？ああ、あれは確か香辛料だった……かな？で、それがどう
かした……のがよく伝わってくるよ、その暗い仏頂面
見てると」

さらりと失礼なことを言われたのは無視するしよう。とにかく
こいつはさつき、演技と悪知恵で逃走したような奴だ。素直に信じ
る訳にはいかない。

が、嘘だと決めつける証拠もない。

「知らなかったなら教えてやろうか？あいつは、奴隷を運んでいた。
人身売買、つまりは犯罪者だ」

「まさかっ！」

速攻で、しかも否定で返された。

「嘘じゃない、なんなら捕まっただやつらに話を聞きに行くか？ちなみにあいつはサイレントの魔法を使っただみただから、物音がしなかったとかそういう言い訳は聞かないからな」

「……いいよ、君が正しいでしょう。なら、どうする？」

「いやなに、もし知った上で護衛なんて引き受けていたんなら……」

刀に手をかけ、思い切り全身の力を込める。

「……其の命をもらっただけだと思っただけ」

「なるほど、ね……ただ、僕は知らなかったんだ……ッ！ただまあ、こんな話を続けてもしようがないね。今日下手に動くのも無理があるだろうし、片を付けたら明日か……けじめはキツチリつけとかなないとね……」

「ほお、こいつ自分から挑発してきたか。明日には片を付けるだ？けじめをつけるつもりとかなんだとか、何を考えているのかはわからないが……」

「いいだろう、売られたケンカは買う主義だしな。さっきは油断しててやられたが、次からは同じ手は食わないぞ」

「へ！？ちょ、ちょっと！？何勝手に臨戦体制に入ってるの！？だから迷惑掛かるって！他のお客さんとか……ってないしっ！んじゃマスターに……ねえなんでこっちにウインクしてんですかマスターさん？もしかしてここ喧嘩専門酒場？」

「何を今さら」

「怖気づいたのか？まあいい、俺もバトルジャンキーじゃないんだ」

相手が戦わない、っていうならまあ手を引こう。……」
喧嘩専門酒場』ってのは存在しないと思うぞ。見世物代わりに喧嘩を容認する酒場ならあるだろうが。

それにマスター……。一つだけ忠告すると、多分その顔でウインクはどうかと思うぞ。

「というわけだ、マスター、話は済んだ」

「了解です。ではお二人様、それぞれお部屋に案内します」

え、まだ僕は前払いの宿賃もなにも払ってないんだけど、というクラデーの声は、聞こえなかったものとする。

ちなみに酒場というところは、この時勢だ。宿屋を兼ねているところが多い。というよりは、宿屋の食堂を酒場として開いていると言い変えた方がいいのかもしれない。

案内された部屋は結構良い部屋だった。

夜景とかそういうものにこだわる気はないが、固いベッドで寝るよりは、ふかふかで柔らかいベッドの方が良いに決まっている。

とりあえず任務の時に汗もかいたことだし、シャワー（水と炎の魔法の応用だ）でも浴びてすっきりするか。

バスルームのドアを開けた俺の耳に飛び込んできた雑音。
それは。

「ふんふんふーん、ふふーん」いやー、ここは眺めがいいなー」

何やら上機嫌な、少年のものらしき、鼻歌だった。

思わず俺は、炎の魔法の出力を誤り、熱湯を浴びる羽目になってしまったのだが、それはしょうがないことと言えよう。

これはあれか、俺に夜討ちしてくれとでもいつているのだろうか。というか、もう少し防音処理ぐらい施しておけよ。奴隷商人ですら、サイレントの魔法を使えたんだぞ！

そこまで愚痴が脳裏をよぎった時には、俺はもうサイレントの魔法の発動準備を終えていた。

約十五分後、夜着に着替えた俺は、色々と精神的に疲れた体を休めるために、読書の予定を削ってベッドに入った。

> i 3 0 9 5 2 — 3 3 4 5 <

何故かはわからないけれど、この時の俺はまた明日からも、厄介事に巻き込まれる気がして、大きなため息が漏れた。

第九話（＊）　お願い（前書き）

はい、玖龍です

みんななんでそんなに上手な文が書けるんだ……！と苦悶しております↑

ちなみに今回は挿絵つきです（……期待しないで）

（＊）は「挿絵つき」という意味です。

第九話（＊）　お願い

「え……？」

ルノーラが思わず声を漏らす。

2人の視線の先には、まだ10歳にも満たないような男の子がうずくまっていた。

その身なりはとてもみすばらしいもので、あちこちに傷もある。

……貧窮に耐えかねて、どこから逃げてきたのかもしれない。

そんな男の子は2人と目が合うと、「ひっ」と怯えたような悲鳴を小さく上げた。

どうやら泣いていたらしい。その証拠に眼のまわりが真っ赤に腫れている。

そんな彼に慰めの声をかけるでもなく、サージャは彼を冷たく見下ろしていた。

「ルノ。帰れ」

「え？なんで？？だってこの子泣いてるよ？」

徐にサージャがルノーラの方へ首を回らす。シニカルな視線を送るためだ。

だから何？と言いたげなその眼に、ルノーラはさらに首をかしげる。

「どうしてあたし帰らなきゃいけないの？というかサージャ、この子に何の因縁が？」

——完全無視しよう

サージャはそう心に決めた。

再び男の子の方へ向き直る。

しばらく見下ろした後、静かに口を開いた。

「おまえ……さっきの見たらろう？」

さっきの——サージャが男2人に絡まれた、というアレだ。

男の子は何かを察知したのか、急いで首を横に振った。
そしてよろよろと立ち上がる。

「お姉ちゃん……強い？」

しかし無視。

「僕ね……お姉ちゃんにお願いがあるの……」

さらに無視。

「ママを助けて……！」

> i 3 1 3 2 0 — 3 8 2 0 <

……？

「あのね、ママがね、知らないおじさんたちに連れて行かれたの」

「……泣くなよ？」

サージャが言うと、途端に男の子は泣き始めた。

「ママああああ！！マーマああああ！！」

「……ちっ」

サージャは足早にその場から立ち去ろうとした……が、ルノーラに止められた。

「ほらあ、サージャ、泣かせたらダメじゃん」

「ルノ。おまえが相手してやれ」

——私はガキが苦手なんだ。特に泣いている奴とかな、とボソツ
と言うと本当に遠くへ行こうとした。

が、今度は男の子の方に阻まれた。

というか抱きついてきた。

「!!」

「お姉ちゃああん！お姉ちゃんはさつき怖そうなおじさん2人をやっつけたでしょ？ママを助けてよお」

「……離せつ!!」

急いで払いのける。少しも力を入れなかったが、それだけで男の子の小さな体は地面に叩きつけられた。

……そして案の定、火がついたように泣き出す。

すると、ルノーラがささず抗議する。

「もう!!サージャ、もうちよつと優しくできないの?」

普通はここで罪悪感を感じるべきなのだろうが、そんなの一切受け付けないサージャ。

平然と立ち去ろうとする。

だが、立ち止まった。

『ママを助けて』という悲痛な声が頭から離れない。

思い出したくない記憶……重なる自分を見つけた。

仕方ない……と、心の底から渋々思った。

一方、面倒見の良いルノーラは男の子を優しく介護していた。ゆっくり立ち上がらせると、服に着いた汚れを払ってやり、普通に慰めた。

その子が落ち着くと、話を聴き始める。

「あのね、ひぐつ……ママがね、怖いおじさんに連れてかれたの、ひぐつ。それでね、ママがね、喋らなくなっちゃってね……」

「そっか……怖かったね。でも、大丈夫！私たちがなんとかして、ママを助けてあげるよ！！」

「その必要はない」

ルノーラの宣言をぶっ壊す発言。

「小僧の母親の気は……自由に移動している。小僧の記憶によると、こいつの母親は奴隷として捕まった。奴隷は秘密裏に西の商業都市ランギルに運ばれる……だが、固まった人間の気は感じられない。あれだ……ギルドだ。やつらが解放したのだろうよ。こいつに似た人間の気は微かに感じられる。だが、ランギルとは逆方向へ向かってるぞ」

私としたことが、よくこれだけ長々と喋ったものと呆れてしまった。

そう言つと、男の子は恐る恐るサージャの顔を見た。

「ほ、本当？ママは大丈夫なの？」

多分な、と素っ気なく返すと、急いで彼から目を離れた。

「じゃあ、お姉ちゃんがお家まで送ってつてあげるよ」

「うん！」

すっかりルノーラに懐いてしまった、男の子は楽しそうに彼女のまわりをうろついている……なるべくサージャの方には近寄らない

ようじ。

「ねえ、サージャ？サージャも一緒に来るよね？」

ふるふると首を横に振る。

「あ、そう……ってええ！？」

なぜそこまで驚くか……かなり疑問だが、敢えて無視。

「じ、じゃあどこ行くの？」

「ランギルへ」

「なんで？もう奴隷はギルドが解放したんじゃないの？」

はあーつとため息をつく。

おまえに教える気はさらさらないんだよ、と目で伝える。伝わるはずもないのだが。

「小僧は任せた。先に行ってるから後から合流しろ」

「……なんで命令形？」

それには答えず、すたすたと歩いて行った。

——あの男の子の記憶……

泣きじゃくってる子供の話など聞きたくなかったので、覗かせてもらったのだが、その中に気になる人物を見かけた。

どう見ても商人風ではない男。

黒目黒髪の優男。

あいつは何者なのか……

それを確かめるべく、サージャはひとりランギルへ向かった。

第九話（＊）　お願い（後書き）

本文中の『記憶をたどる』というのは、アレです。
透視です。。

こんなこともできるんですね、サージャって（笑）

第十話（*） 世界樹（前書き）

更新遅くなりました。

（一応は）挿絵付きです。

第十話（*） 世界樹

「あのお姉ちゃんねー、マントアレルギーなんだよ。」

赤髪の少女が去っていった後、突如そんなことを言い出した隣の少女を、少年は驚いて見やる。一瞬ふざけているのかとも思ったが、表情は至ってまじめだ。

「ええつと……」

が、また唐突に、少女がしゃべり出す。今度は、少年の羽織るマントを指して。

「だからね、そのマントが嫌で機嫌が悪かっただけなの。だから君のことが嫌いなわけじゃないよ。」

これが笑っていたり、不自然に目をそらしながら言っていたりすれば、少年も疑っただろう。だが、隣の少女の表情はまじめそのもの。そこにさつきから優しくしてもらったという付加が加わって……結果、少年は顔をほころばせてこう言う。

「そっか！あのお姉ちゃん、これが嫌だったんだ！そうだよ、汚いもんね！」

完璧に信じた。信じてしまった。

もしこの場に二人以外の誰かがいたら、「いや、マントアレルギーって何よ」と突っ込んだかもしれないが、あいにく、こんな森の奥にそうそう人はやってこない。

「そういえば君、名前は？」

「僕？僕口ナ。お姉ちゃんは？」

「私ね、ルノーラっていうの。ルノで良いよ」

「分かった、ルノお姉ちゃん！」

慣れないお姉ちゃん呼びに少し照れながら頭をかいていると、突然脳裏にひらめく物があった。というか、大切なことをすっかり忘れていた。

「口ナ、ごめん忘れ物！ちよつと来て！」

「え…うん。」

そうして、茂みをかき分けていって…

ロナは言葉を失った。

「いやー、さっきの人食いすっかり忘れてたよ。」

「…これ…この巨大な炭…何？」

「ん？熊だよ？っていうか、炭とか言わないの！ちよつと焼きすぎただけなの！」

「……え。じゃあ、さっきの火柱って、これ？さっきのって、ルノお姉ちゃんか？」

数歩、ルノから遠ざかるロナ。

「そだよー。…お、良い感じ。じゃー！今夜は熊鍋でーす！おー！」
遠ざかるロナを、捕まえ、無理矢理片手をあげさせるルノ。

「え、え…え？」

「ほら。おー！」

「え、お、おおー……」

「オツケー、んじゃ帰ろう！」

ルノはそういつて、いとも簡単に、身長を超える熊を担ぐ。

そうして二人は森を出て行った。

一人は意気揚々と、もう一人は、目の前の人とは思えない存在に、畏敬の念と若干の恐れを抱きつつ。

> i 3 1 7 5 1 — 3 8 3 9 <

ところかわってカデイムの町の中。

いかにも力のなさそうな細身の少女が巨大な熊を抱えているにもかかわらず、道を行く人々が、特に関心を払うことはない。たまにこちらを見る人もいるが、「またルノか…」と言って、すぐ興味をなくす。

「ロナの家に帰る前に、うちにこれ置いてって良い？」

「うん！でも…ルノお姉ちゃん、それ重くない？」

「え？ああ、うん。大丈夫！これ、魔法で浮かせてるから、ほとん

ど重くないんだ！」

「ルノお姉ちゃん魔法使えるの!？」

「そうだよー。知る人ぞ知る、天才魔法使いとはこのルノーラ様の……」

ルノが最後まで言い終わる前に、後ろから頭をはたかれた。

「この人通りの多いメインストリートで何恥ずかしいこと騒いでやがんだお前は。」

「あ、おっちゃんおはよっ！」

「もうすぐ夕方だ。」

ルノの呼ぶおっちゃんというのは、アラド酒場の店主、ディム・アラドのことである。ルノが夕食と言う名の有害物質を作ったときなどに、よくサージャと二人で世話になっている店だ。ディムは（こついくせに）料理がうまい。

「サージャが居ないなんて珍しいな。別々に出て行ってもたいてい一緒に帰ってくるのに……ん？その坊主誰だ？」

「あたしの子っ！」

「坊主、お前誰だ？」

「ちよっ、ひどー！あたしは無視!？」

ルノでは埒が明かないと思ったのか、ロナに直接聞くとするディム。だが、ロナはその強面にすっかり怯えており、「あっ……え……」と、あまり話になりそうもない。あまつさえ、ルノ（熊）の後ろに隠れようとまでしている。

「おっちゃん顔怖いんだからさあ、あんまり近づかないであげてよ。そんなんだから、ちっちゃい子に『悪魔の化身めー』とか言って石投げられるんだよー。」

「ちよ、お前、なんでそれ知って……」

「ルノは何でも知ってるもんねー!……じゃないや。この子はロナ。お母さんが、奴隷として連れて行かれちゃってー、サージャの強さ見て追っかけてたの。今家に送るとこ。」

いまいち要領を得ない説明だったが、ディムには何とか伝わったら

しい。話の途中で肩をふるわせ始めた。ルノが、どうしたんだろうと顔をのぞき込むと、突然叫びだした。…盛大にツバを飛ばしながら。

「いけ！自称天才魔法使い！その子の母を助けてこい！」

「いや！もうギルドが助けたから！そして自称は余計！」

「…ホッ、なんだそうなのか、良かった。そしてどう考えても自称だろ。」

「自称じゃないもん他称だもん！っと、日が暮れちゃう。じゃあ、そろそろ行くね。」

そういつてルノはあつさり背を向ける。その結果ディムは背中の熊としたくもないご対面することになり…。

「なあ、お前、だいぶ前から気になってたんだが…。それ、人食いじゃねえの？丸焦げでよく見えんケドよ。んな図体でかい熊はあいづくらいだろ」

「ピンポン！正解！あたしとサージャに手え出そうとなんてするから、哀れ今夜の晩ご飯。またお裾分けに行くね。」

「…あ、ああ、お裾分けは良いんだけどよ、前みたいに生肉そのまま置いてくのやめろよ？でかい臭いわで、客が怯えてしょうがなかったんだぞ。」

「大丈夫！今回は『みでいあむ・れあ』だから！じゃあね！」

そういつて今度こそルノとロナは帰って行った。

二人の話を立ち聞きしていた人々に「いや！どう見ても丸焦げだろ！」と突っ込まれながら……。

「じゃ、ロナはここで待っててね。あたしちょっと森にもう一回用事あるから。」

ここはルノとサージャの自宅。熊を近所に配り終え（大半の家で苦笑された）、一度はロナの家に向かったのだが、結局幼いロナを一人で置いておくのは危ないと判断し、ひとまずルノと一緒にいることになったのだ。

「一応、扉は外から開かないようにしておくけど、鍵開けちゃだめだよ。」

「はい。」

その返事を聞いて、ルノは満足したように口ナのを軽く手で、手を振りながら森の方へ走っていった。

森の中、夜の闇の中を、白い固まりが走る、走る、走る――
そして、どんなに森に精通した猟師でも立ち入らない最深部に、消えた。

「ししょー、起きてー。」

ルノは、目の前の巨木に話しかける。だがそこには誰もいない。ただ、木があるだけだ。だが、ルノは話かけ続ける。

「ししょー、起きてつてば！緊急事態なの！聞こえてるでしょ！……」

燃やすよ!!」

「……
 ったく、師匠に向かって燃やすとは何事だ、ルノーラ。」

どこからか声が聞こえてきた。人の声とは違う、もっと重厚で、脳に直接響くような声。

目の前の木が話している。

にわかには信じがたい光景だが、巨木は確かにそれを信じさせてしまっただけで、まう圧倒的な貫禄を持っている。

「だって、ししょー起きてくれないんだもん！今日サージャがね、」

「よい。知っている。で、なんだ？」

「サージャがどうしてランギルに行ったのを知りたくて。」

「それが緊急事態か？ そんなこと分かるはずも無かるう。私が分かるのは、実際にあったことのみ。お前の相方が何を考えていたかなど、私の知ったことではない。それにあいつは合流しろと言ったのだらう？ ではそのときに聞けばよい。」

「またまたー、ししょーならあのときサージャがロナの記憶の中に何を見たのかくらい分かるでしょ？サージャあのとき透視してたか

らね。何か見たのは間違いないんだよ！それにサージャきつと教えてくれないしねっ！」

夜の闇も合わさって、物々しい雰囲気の中、ルノは一人だけフランクな口調を崩さない。

「お前はこの老木にまた無理をさせる気が。第一私はあまり人間は好かんのだ。」

「でも私には、魔法教えてくれたじゃん。」

「それはお前らの親がっ……」

「……？」

「いや、なんでもない。……はあ、仕方ない。どれ……よし、ルノーラ、私に触れてみる」

ルノが言われた通りに触れると、突然、頭の中に次々と映像が流れ込んできた。

ロナの記憶、

サージャの記憶、

ランギル付近の、空間の記憶

「サージャはこの黒髪をみてランギルに……でも、この人誰だろ？ん

！……いや、見覚え無いなあ。他に………ッ」

次々と現れては消えていく映像の中に——ルノは小さく息をのんだ

あれ？あたし、この人……知ってる？え、でも……誰？……え？……あれ、

え、え、え……？

「おい！ルノーラッ！」

「ふあっ？……ハア……ハア………はえ？」

「はえ？ではない！急に動かなくなっただと思えば、突然ふらつと倒れたのだぞ！」

よく見てみれば、自分の身体が不自然に傾いだまま、見えない何かに支えられている。

「あー、ししょーありがと。……なんか怒ってる？」

「それは大切な……それより、いったい何を見た。」

「んー、よく分かんない。でも……あたしもランギルに行かなきゃ。」

ルノは立ち上がりながら―元々倒れていたわけではないが―言った。もやのかかったような自分の記憶に一抹の不安を抱えながら。

「じゃあ…ロナも心配だから…そろそろ行くね。」

ふらふらと重い足取りで立ち去ろうとするルノに巨木は何か言おうとしたが…やめた。何を言ってもコイツは「だいじょーぶ、だいじょーぶ」なんてヘラヘラと笑うだろう。

なら…

「ルノーラ、気をつけろよ」

その言葉にルノは一瞬驚いたように立ち止まって…そして晴れやかな表情で言う。

「ありがと世界樹^{シグルム}ツ！」

こうしてルノーラは師匠である世界樹^{シグルム}―世界の初まりの木―を後にする。すぐにランギルから帰ってきて、またただらとここで過ごすつもりで。

すぐに帰ってなどこれなくなることは

彼女も、

世界樹も、

誰も、――知らない

第十話（*） 世界樹（後書き）

はい、なんか誤字脱字あったらすみません。世界樹は、世界の始まりを同時に、生まれた木です。何でも知ってます。ルノがししよししよー言ってる通り、ルノの魔法の師匠です。

第十一話 ランギルへの道（前書き）

雨音ジエンナです。久本さんが忙しいそうなので先に書いてしまいました（テヘ

幼女と絡ませたかったのでこんな話になりましたw

第十一話 ランギルへの道

ゴトゴトと律動的なリズムが伝わってくる。今、ボクは馬車の上。

「お兄たんつ。これ見て〜。」

可愛らしい幼女が、絵を握りしめてボクの方に向かってくる。さすが商人の娘というか、馬車の上でも安定のバランス感だ。

「ん。見せて。」

それだけいうと、幼女の絵を覗き込む。見た感じ5歳くらいだけど、結構上手だった。どうやら、絵を描くのが好きらしく、ずっとなにかを描いてはボクに見せてくれていた。

一体、護衛^{ボク}がどうしてこんなことをしているかというところ……。

塩の商人の護衛として雇われたはいいけれど、ボクだけは「子供の護衛」という名目で、別の馬車に乗っていた。商品が積み込み切れなかったとき用のサブ兼、住居空間として使われているものだ。確かに、重要っちゃ重要だけど……。ちみつこいからって、戦えないとも思われているのだろうか。仕方ないので、子供たちの相手をして過ごしていた。ちなみに、いるのは、5歳くらいのさっきの幼女と、7歳くらいの男の子。それから、13〜14歳くらいに見える女の子だ。おとなしい感じの子で、ずっと弟たちをただ見守っていた。

「お兄たん。」

また、あの幼女がニコニコしながらボクに話しかけてくる。

「リアね、今度はお兄たんを描いてあげる。」

「……ありがとう。」

魔法で声質をもっと男っぽく変えれば、もっとちゃんと話してあげられるけど……。とか思いつつ、無愛想に返事する。子供は純粋な分、魔法の所為で生じる微かな違和感にも気付いたりする。こんな対応でも、何故かボクを気にいつてくれているので、わざわざ魔法を使わなくてもいいか。と思った。リアちゃん幼女は、早速ボクを描いてくれているようだ。それを横目に、特にやることもないので、荷台の後ろの方に腰かけ、外を眺める。平和、だった。なんでボクを雇ったんだろう……。

素晴らしい陽気＋平和＋単調なリズム＋退屈＋お腹が減ってない＝眠くなる

というわけで、うつらうつらし始める。なんか幸せだ。徒歩の旅は、楽しいけど疲れる。たまにはこんなのもいい。

気付いたら、辺りがオレンジ色に染まっていた。夕方だ。一応子供たちが無事かは確認するが、まあ寝てても怪しい気配があるうち

やんと分かるので、心配はしていない。

「お兄ちゃん起きたー。リアお兄たん描いたよー。」

早速リアちゃんが寄ってくる。

「ほらあ、これがお兄たんだよー。リアね、お兄たんの為にがんばって描いたんだよ。」

少し舌つ足らずな喋り方で、一生懸命教えてくれる。

「……リアちゃん。これ。。。」

なぜか、ボクのフードの両側に、出っ張りがある。まるで、猫耳みたい。リアちゃんに問いかけると、元気にこう答えてくれた。

「それね、猫しゃんの耳みたいなのー。お兄たんに似合うと思ったー。」

「……………ありがと。。。」

何故に猫耳?! え、似合うってなによ。今までそんなこと言われたことなかった。などなど心の中でツッコミまくりながら、お礼を言う。……猫耳、、ねえ。。

夜。野営地で夕食を食べて周囲を警戒していた時。ボクは13、4に見える女の子(ラーシャっていうらしい)に呼び出された。

「ちょっと動かないで。」

こんなことを言われ、馬車の荷台に座らされる。

——五分後。

「はい。」

鏡を渡されたボクは、

「……。」

フードが猫耳付きになっているのを確認し、絶句した。裁縫道具をもってフードに何か縫い付けているのは分かっていたから、予想はしたけれど、実際見るとやはり驚いた。

ラーシャは、ただただ笑っていた。

翌朝。ボクはランギルに入ることができた。実際はもっと早く入れる予定だったらしい。奴隷商人の取り締まりの関係で、ランギルに入ることが出来なかったと言われた。

町に入ったところで一行と分かれる。クプリュス亭への行き方も聞いた。一行は商会で塩を売るために交渉したりと、しばらく此処ランギルに滞在するようなので、また会えるかもしれない。

ちなみに。別れる直前、ラーシャはポツリと『じゃあね。女の子なんだから体大事にしてね。』って呟いた。えと。。。ばれてる？

第十一話 ランギルへの道（後書き）

ジエンナさんは子どもがあまり得意ではないようです。まあ、元々喋らないんですけどw w

あー……。文章力と画力欲しいw

第十二話 ランギル漫遊（前書き）

久本です。

ちよっと今回は自分でもよく分からない話に（笑）。

まあ、クラは楽しそうなんで（基本いつもですが）それでよしとしてやって下さい（↑何を！？）

それでは、どうぞ。

第十二話 ランギル漫遊

「んっ・・・・・・・・朝ですよ、っと・・・・・・・・」

軽く伸びをして、ベッドの上で起き上がる。あー、やっぱりちゃんとした布団つてのは柔らかいな。ふかふかしてて、なんていうかもう贅沢っ！て感じがして。

でも、寝てばっかいるわけにはいかないよね。今日は、ちょっとばかり忙しくなりそうだし。

軽く顔を洗ってから着替えをし、下に降りて行くともうマスターが起きていた。

「あ、おはようござ」「おはようございます、お客様」・・・・・・・・・・おはようございます」

やっぱり掴みどころの無い人だよなあ・・・・・・・・決して嫌いではないけれども。

「お客様、朝食はどう致しますか？不要であればその分の代金はお返ししますが」

「あ、あれって朝食こみだったんですか！？随分安いですよね！？」

「それが、経営方針ですので。・・・・・・・・それで、どう致しますか？」

「あ、今日は結構です。一日中外に居る予定ですので」

「さようございますか。それでは、お気を付けて」

「はい！それじゃ、失礼しますね！」

外に出て、さて、まずどこから当たってみるべきか……。と、そこで微かな嘶いきが聞こえてきた。ん？馬でもいるのかな？えっと、確かこっちの方から…………

「え！？」

思わず声が漏れた。そこにいたのは馬によく似た、でも馬とは決定的に違う生き物。魔獣、妖獣、幻獣……。色々な呼び名があるが、とにかくそこにいたのはただの動物ではない。

「——ゆ、ユウ一角獣……………」

信じられない……。その魔力や体力もさることながら、とにかく出会いにくいと言う一点で有名な幻獣が、商業の街とはいえ街中に……。ってあれ？あの子、もしかして野生じゃないのかな？うん、野生じゃない。だとしたら、あのマスターか、それとも隣の人かな？どっちも一癖も二癖もあったから一角獣ユウを連れてたとしても違和感がまるでなくて特定できない……。なあ…………。

まあ、いいか。どっちだとしても、後で事後承諾だけ貰つとけば。という結論に落ち着き、そつと真つ白な頭に手を伸ばす…………。けど途中で、絶対に人を寄せ付けないような目を見て手を引つ込めた。うーん、どうしたらこの子と友達になれるかな？

「うーん……。君、多分僕の言ってることは分かるんだよね？じやあちよつとでいいから話がしたいんだけど……………」

そこまで言うと、初めて興味を示したようにこっちの方をちよつ

と見た。

「あ、話は聞いてくれるの？ありがとね」えーっと、それじゃあ、まず僕と目を合わせてくれる？・・・いや、別に何もしないから大丈夫だってば。ほら、落ち着いて落ち着いて」

ちよっぴり嫌がるそぶりをしながらも、目はちゃんと合わせてくれた。うん、なかなか素直な子だ。

「じゃ、そのままじつとしてて・・・ん、もうちよっと・・・よし、完了っ」と

その瞬間、その一角獣ニコーンの思考がざっくりしたイメージとなって頭の中に流れ込んできた。

「あ、君やつぱりお隣の・・・へえ、ライトっていうの？そのスピカ？」

そう聞くと、軽くうなずいて返した。もうその目にも敵意はなく、落ち着いて澄んだ光を放っている。

と、その中に一つ、気になるイメージを見つけた。これは・・・なんだ、あの屑は昨日のうちにライト君が消してたのか。なら、僕が動く理由もない・・・自分の手で始末が付けられなかったのは残念だけど、しょうがないか。え、考えてたことが黒いつて？僕は結構こんなもんだよ？

まあ今日のところは、街の散策でもしてみよう。

「スピカ、ね。もう分かってると思うけど、僕はクラディー・・・まあクラでいいよ。よろしくねっ！あ、ねえねえ、ちよっと撫でてみてもいいかな？」

図々しいかと思ったけど、むしろ自分から頭を下げて撫でやすいようにしてくれた。なんか嬉しい。

「へへへ・・・あ、そうだ！僕さ、これからこの街見物ランギルに行くんだけど、もしよかったらスピカも一緒に来る？」

試しにそう聞いてみると、少し迷った後で結局首を横に振った。
うーん、もしかして主人ライト君のことを気にしてんのかな？まあ、確かに無断で連れ回したりしたら僕も怒られるだろうしね・・・。

「そうだ！ちょっと待っててね、手紙書いてくるから」

軽く首を傾げるスピカ。

「断っておけば問題ない、でしょ？」

軽くウインクして言うと、明らかに笑い顔・・・もうちょっと正確に言っているとイタズラを思いついた子供の様な笑い顔をしてきた。
間違いない、僕おもしろがってると同じだ。

「君とは気が合いそうだよ」

頭をポンポン、と撫でてから立ち上がると、僕は紙とペンを借りて宿へ引き返した。

「これでよし、と……じゃあ行こつか、スピカ！」

一応書置きも残したし、後はどうにでもなるだろう。とりあえず、しゅっぱーっ！

はあ、遊んだ遊んだ……。一日かけて街中歩き回ると、さすがに疲れるもんだ。え？スピカに乘せてもらわなかったのかって？うん、一角獣^{ユニコーン}って生き物には、ある有名(?)な種族としての特性があるんだよ……。曰く、

乙女しかその背に乘せない。

乙女しかその背に乘せない。

これホント。大事なことでリピート。僕の場合男だから、撫でるまでは良くても載せてもらうのはダメ。全く、ライト君はどうにかして乗せて貰ってるのかな？それとも、実はライト『ちゃん』だったとか……。

と、そんな馬鹿なことを考えていると、わりとげとげしい視線……というか敵意とか殺意むき出しの視線を感じた。

「!？」

反射的に振り向くと、人ごみの中からこつちを睨む、一人の女の子と目があつた。はて、誰だろう？っていうか、こんなパターン昨日もあつたような……。

「（スピカ、スピカ）」

声を落として、口をなるべく動かさないようにしてそつと呼びかける。

「（ちよつとごめん、今から街の外行ってくるから。先に戻っていいよ）」

軽く、かすかに首を横に降るスピカ。どうやらついてくるつもりらしい。

「（……ん、わかった。それじゃ行こっか）」

後ろに警戒しながらもあくまでゆつくり、街の外に出る。

「今から外出かい？夜になったらこの門も今日は閉めるから、それまでに帰ってくんだよ！」

「はい、わかりました！」

門番の忠告を背中に聞き、ランギルの外に出た。さて、ついて来てるかん……。っていないし！うわ、気付かなかった！ついて来てると思ったのに、なんか裏切られた気分！

「うん……。しょうがない、帰ろっかスピカ……。」

なんか虚しい気分と共に引き返そうとした矢先に、声が聞こえてきた。今度は誰だろう？

第十二話 ランギル漫遊（後書き）

ちなみにこれが投稿される十一月五日の午後七時つて、僕の誕生日でもあつたりします♪

・
・
・
・
・
・
・
え、知らん？どうでもいい？はい・
・
・
・
・
・

第十三話 ランギル売買（前書き）

こんにちわ、おはようからお休みまで登場しない真野優です。

特に語ることもないので、第十三話、お楽しみください。

第十三話 ランギル売買

翌朝、オリジナルの目覚まし時計で気持ち良く目覚められた俺は、何時もならあるはずの気配がないことにすぐに気がついた。

ユニコーンである俺の相棒、スピカは人に触られるのを嫌がるため、普段は厩舎に預けたり、宿の従業員に面倒を見てもらったりはしないんだが、その代わりに戦闘時ぐらいでしか気配は消したりしない。

色々な魔法を使えるスピカは、「エアテレパス 大気通信」の回路を俺や、数少ない彼女が心を許した相手に繋ぐことで、距離が離れていてもさほど消耗することなく、会話することができる。

ただ、この魔法は、『普段認識できる、音の正体である空気の振動を減衰させることなく、特定の相手にのみ届くよう収束させ、コントロールする』という効果なため、「声を出さずに」や「水の中でも」というようなわけにはいかない。

途中で結界でも張られていれば届かない上、そもそも相当緻密な操作精度と精神力がなければまともに発動すらしない。

話が逸れたが、スピカの気配がないということは、どこかで戦闘状態に入っているか、寝ているか、あるいは……なにか悪戯をたくらんでいる時か。

普段は俺よりもずっと早起きなスピカが、特に激しい戦闘も行っていないのに寝坊するのは珍しい。

だがまあ、可能性は零ではない。知らないうちに疲れが溜まってたのかもしれないしな。とりあえず俺の持つ精神感应系魔法「テレパス 念話」でスピカにモーニングコールを送ってみる。

「おい、朝だぞ。お疲れのところ悪いがそろそろ起きたらどうだ？」

何の変哲もないモーニングコール。
そしてなぜか返信がない。

「どうしたんだ？まあなにはともあれまずは朝食か」

首をかしげながらも、服を着替え終わった俺は、自分の部屋を後にした。

そしてその瞬間、目に入る一枚の紙切れ。拾い上げる間もなく内容は読めてしまった。

「なんとというか、スピカになつかれちゃったし、僕も楽しいしで、彼女を一日お借りするよ、ごめんね」

「……あの（自粛）……上等じゃねえか……！」

ちらりともう一度紙切れを睨み付ける。

魔力を込めた一瞥に耐えられるほどの紙ではなく、一瞬で燃え尽きた。

だがスピカが悪戯で「わざと」気配を消しているなら見つけるのは困難だ。あのハ（自粛）の方も、スピカが隠してるだろうから、探すだけ時間の無駄だ。

「買い物にでも行くしかない、か。運よく見つけれれば……突然、晴れ渡った空から降ってきた雷に当たることになるだろうな、あいつは。よしそれでいいこう」

ばったりすれ違った人が何やら怖いものを見るような目つきで、

こちらを見てきたがなぜだろう。そんなに黒い顔をしてたのか？

と、思ってから先の思考が口から洩れてたことに気付いたが、何とか平静を保てたと思う。

しばらく歩くと、ひときわ賑やかな大通りに出た。

ここはランギルの中でも随一のでかさと質のいい店が出回っていることで有名だ。

ちょうど反対側にある、通称「闇市場」とは真逆の存在である。

「おいそこの綺麗な金髪の坊主、なんか買ってたか？」

この街には金髪なんてあまりいない。基本赤と黒で構成され、その色素が混ざって出来た茶髪の人も存在する。

もちろん白髪や銀髪等もいるが、緑や青などはまだお目にかかったことがない。

よって、呼ばれたのは俺だろうと、一応は声の主の方を振り返る。

「何を売ってるんだ？」

そこにいたのは、いかにも「気前とガタイのいい武器屋のおやじ」だった。見に纏う雰囲気通り、営業している店は武器屋だった。

「見ての通り、武器屋なんだがな。今日はいいい品物が入ったんだ。お前さん見たところ刀剣使いだろ？」

「まあそうだな。で？　続きを頼む」

「ハハッ、そうせかすなつて。品物つてのは二種類あつてな。一つは投擲用ナイフだ。それもただのナイフじゃなく、魔力付加に特化しててなあ。どんな属性の魔力だろうが、本体の切れ味と投げた時の加速度が増し、しかも属性のダメージ、相手の防具の貫通力まで上がるそうだ。まあそこまで魔力を込められる奴もまずいねえだろうが、極限まで魔力付加したナイフを刃先を地面に向けて肩の高さから落とす、ただそれだけで深さ五メートル、長さ百メートル、横幅も五メートルの地割れが起きたらしい。しかもその中心でナイフは無事に転がってたってんだからすごいよな。あ、勘違いしないでくれ、その実験は本当に誰かが落としたんじゃない、ロープとか使つて離れたところから安全にやったやつだからな。『そんなもんやった本人や目撃者も死んでるだろ、つまり嘘だなこらッ』とか言う目線でこつち見るのはやめてくれ」

……アホみたいなナイフだな。矢から矢尻を外して代わりにそれをくくりつけて、バリスタで飛ばせば……一撃で何処の城でも落とせるだろうな。

「おっさん、それ実物を見せてくれないか？　一応魔力は持つてるから、一度付加させてくれ。前向きに購入を検討中だ」

「それはうれしいねえ。買わなくてもいいぞ、タダで切れ味上げてくれるってんなら儲けもんだ。今はだれも魔力付加してないから、属性による相克も心配がない。ほらよ、受け取れ。ただし持ち逃げしようとするなよ？」

にやりと笑う店主だが、その眼が笑っていない。

鞘におさめられたナイフは、質素で何の装飾も施されていない。実用性を高めたナイフだ。

黒塗りの鞘から抜き、銀色に輝く刀身に、軽く魔力を流し込んで

みる。

すると一切抵抗を感じずに充填されてゆき、黄金色に少し光りだした。心なしか、前よりも刃の部分が鋭くなっている気がする。

「おお、お前さん雷の属性持ちか。こりやあいいエンチャンター候補だな。ついでだから、後二本も頼む」

何やら喜ぶおやじに頼まれて、ナイフにすべて魔力を流し込む。ある程度発行させたところで止めて渡した。

「で、おいくらなんだ？」

「なんとびつくりの99998ルドだ」

「……微妙なお得感がなんとも言えない金額設定だな」

今の相場だと、10ルドあれば人が一日生活できるだけの金額。1ルド＝100トセンで、俺の今泊っている宿が5ルド。飯なんかも含めればまあだいたいそれぐらいの金額には成る。

次に通常の投擲ナイフが一振りで150ルドもしない所を考える。と、ぼったくりでしかない気がする。

最後に今の俺の所持金だが、あまり金を使って来なかったため、五十万ルドはある。

硬貨は統一されているが、ルドは銀貨が500まで、金貨になると一万ルドのものがある。

「さておやじ……値下げ交渉と行こうじゃないか」

「望むところだぞ坊主。もう一つの製品も後で紹介してやるから、懐に金は残しておけよ？」

そして壮絶な争いが幕を開けた。そして十分後、俺たちは店頭でがっちりと握手を交わしていた。

結ばれた契約は、「さつきとは違い、俺が限界までナイフやその他の店内の武器に魔力付加を施すこと」で、五万ルドまで値下げしてもらい、二本のナイフを購入することになった。

ちなみに、俺の魔力付加の限界よりも、ナイフの極限が先に来たらしく、ナイフがまぶしく発光を始め、これ以上魔力を流し込もうとしても押し返される感覚があるだけだった。

「おやじ……間違っても鞘から抜いた状態で落とすなよ？」

鞘はナイフのスイッチのようなものらしく、中に収めている時は落とそうがぶつけようが反応しない、普通のナイフ。

抜いた状態で、一メートル以上の距離を誰も触れない状態で移動した後、着弾時に魔力を一気に解放する。とこういうことらしい。

だから投擲用でもあるが、極限までキレ味を上げたナイフだ。普通に近接戦や素材部位剥ぎ取りの際にも使える。

これはいい買い物をした、ということとでバックに収納し若干浮かれ気味の俺は、まだ話は終わってないとばかりに、それからも親父に拘束されていた。

その後、見せてもらったのは弓。弓をメインに扱っていた店がつぶれたらしく、そこに流通するはずだった品が流れてきたらしい。三品あり、『シェキナーの弓』『アッキヌフォート（無駄なしの弓）』『虹色と雷光の弓矢（これには名前が付いていないらしく、扱えるのも雷の属性持ちだけなため、ただで譲ると言ってくれた。ただし、前記二つのうちどちらかを買えば、だが）』だ。

俺は弓の事は詳しくは分からないが、用は物凄い古い時代から残る、如何にも何か強そうな力持ってます私的な主張をしている弓と、狙った獲物には必ず当たる弓だ。

どちらもお値段は三十万ルド。それでも大分安いが、これ以上値上げしてもこの地域では買う者がいない。

どこかの貴族のお飾りに使われるよりは、実際に誰かが武器として真価を発揮している方がいいんだそう。

そこまでなら格好いいセリフも、どのみち原価は十万ルドだったからばったくりだがなあ。などと余計なことを言ったために、ただの守銭奴のおっさんに早変わりした。

今度マジックアイテムの、空間拡張収納バックを買うか作るかしないといけないな、と思いながらも、アッキヌフォートと虹色と雷光の弓矢をいただいた。

本来、食料を買いに来たはずなのに……。等と少し後悔もしたが、それに見合わないぐらいの上等な武器を手に入れただけましだろう。

なんでも、近々どこかで戦争が起きそうな気配なんだとか。

俺達傭兵はどうなるか分からないが、武器を手に入れておいて損は無い。

とりあえず、人間を気絶させられる程度の雷を、「虹色と雷光の弓矢」の機能で矢に変換し、それをアッキヌフォートで発射した。必中の弓が追って行ったのはもちろん、あのハグ（自粛）だ。

あいつが帰還した時に話を聞けば、この二つの機能が正しく働いていること、だまされたわけではないことが確かめられるだろう。場合によっては、お仕置きもできて、能力の実験もできて、誰にとってもハッピーな一石二鳥の結果になるだろう。

後は宿にいったん戻って武器を置き、盗難防止の魔法をかけた後、保存のきく食材を購入しに行った。

そして再度宿に戻ってきたときには、財布の中身がほぼすっからかんになっていたのは、語るべきではないことだと俺は思う。

第十三話 ランギル売買（後書き）

ミニ講座！

アッキヌフォート：ケルト神話に出てくる弓の名称をお借りしました。

虹色と雷光の弓矢：アフリカのとある民族の伝承にでてくるそうです。

なんだかいきなりライト君が強くなったような気がしますが、初期設定と違い雷以外の攻撃系魔法が使えないようになってる上、腰に二本の刀と剣を持っているときは、弓なんて背負ってられないので、遠距離主体か近距離主体のどちらかの装備になりますね。

ちなみに必中の弓だからとはいえ、当たったところで死ななかったり、貫通力が足りなくて鎧で弾かれたりはします。

久本 & amp; クラからの追記

クラは別にハグ（自粛）ではありません。んな設定付けた覚えはさらっさらないので、間違えないようお願いしますね。

追記

意外と金銭感覚のない、そして語彙の貧弱なライト君でした。

禿げてなかるうが「ハゲ」と言ってしまうのは現代でもよくあることですねw

第十四話（＊） 黒髪優男搜索の旅（前書き）

冬眠したいと日々思ってる、玖龍です。

ガチで冬眠したい……！そして英語小テスト乙。

……こんなところで愚痴っけていても始まりませんね（汗）

第十四話（＊） 黒髪優男搜索の旅

「いやぁ……ちょっと通せないかな、うーん」

ところ変わって、サージャはカディムより西にあり、大商業都市ランギルを抱える、サロベイユという国へ入国しようとしていた。いつも通り、無表情の仏頂面なサージャは、いつも通り目の前に立つ人物をじーっと見ていた。

隣の国へ行くだけでも、入国審査というのが行われる。

目的は多々あるが、とにかく不審な人物は入れないように、というスパンダム大陸全土の国で決められている、いわゆる国際法だ。

入国には、まず身分証明書が必要だ。

国籍やら、プライバシーやらを記した、ちょっとした証明書があれば、大体通してもらえる。

今や、認証システムも格段に進歩したので、偽造されたものはすぐに見破られ、御用となる。

「ね、お嬢さん。こういうのがないとサロベイユへは行けないよ？」

役人風の男が手元から一枚の紙切れ——国際法で定められた規程の証明書を取り出す。

「ふん。そんなものがどうした。ただの色がついた紙切れじゃないか……金の無駄だ」

サージャが男に向かって吐き捨てる。

もちろん……サージャがそんなものを持っているはずがなかった。元々、ここに来る予定はなかったのだし、まず、家にもない。ルノーラなら持つてるかもしれないが……。

（ルノーラと来ればよかったかもな……うるさいけど）

サージャがそんなことを思っていたとき、彼は若干眉を顰める。

「あのねえ……！さっきから無駄だ無駄だって言うけどさあ、これって立派な犯罪防止なんだよ？だからやってるわけ」

「私がそんな重大な犯罪を犯すように見えるのか？詳しく言ってみろ……何時間でも付き合ってやるぞ」

「いやさあ……そんなこと言ったらおしまいだよな」

それに、とサージャは口を開く。

「おまえたちの管轄ではないが、易々と奴隷商人を入国させているくせに、私を入国させないとは一体どういう料簡だ？」

「なんだって!？」

男は軽く悲鳴を上げる。

奴隷商人の存在は後を絶たない。

これも国際法で定められているものの一つで、全国家に納められている、国際規程書に『人々を強制的に拘束・服従させることはできない』とある。

そういうわけで特に厳しく取り締まっているはずの奴隷商人の入国を見逃してしまった同僚に軽い失望と、奴隷商人に怒りを感じたのだった。

「まあ、安心しろ。どこかのギルドが1件は未然に食い止めた。もう既に拘束されていた人々は解放されたようだ」

「なんで知ってるんだ……？」

「まあ、ちよつとね……ところで入国させてもらえるかい？」

サージャは表情を変えずに言う。すると男ははぁーっとため息をついた。

「まあ……有益な情報はありがたく受け取っておくよ………だけどそれとこれとは話が別だ」

そういうと男は引き出しからゴソゴソと何かを取り出した。

そして胸元からペンを引き抜くと、さらさらっと文字を書いていた。

「……？」

「これ……話を聴いていると、どうやら君はこれを持っていないようだね。今回は特別さ……それに君はランギルに行くんだろ？これがないとあそこは入れないからね」

そして、ペンを手渡すところに名前を書くよう、と言った。サージャはそれに従う。

「これで、晴れて正式に入国することができるよ。ようこそ、サロベイユへ！良い旅を」

何が面白いのか、超笑顔で彼はサージャへ手を振った。

彼女は無表情のまま一応頭を15度ほど下げ、後ろを振り返らずにすたすたと歩いて行った。

あの役人が速攻で作ってくれた通行所のおかげで、サージャは難なくランギルへと入ることができた。

——？——ここにあの黒髪優男がいる、はず。

サージヤは周囲に気を配りながら、中心部へと進んでいく。

あの男の気をつかえられたわけではないが、目を凝らし、耳を澄ませ、集中すればわかるはずだ。

「えへへ、スピカは可愛いなあ……あの男とは違って」

「？」

少し離れたところから、何やら変なセリフが聞こえてきた。街中で、しかもここは商業都市にもかかわらず、路上でいちやつくカッブルもいるのか……

そう思い、サージヤは声の方に首を巡らす……そこには一角獣ユニコーンがいた。否、正確には、一角獣ユニコーンと戯れる、あの黒髪優男がいた。

「あ」

思わず声を漏らす……そしてクククと内心で笑った。

「さあて……どう料理しようか」

一瞬、口角が持ち上がる。そしてすぐに元に戻る。

じいーつとその男の動向を見ていると、突然彼が振り返った。そして周囲をキョロキョロしている。

「チッ」

サージヤは身を翻す。

こんなところで大騒ぎされたら困る……！

急いで物陰に隠れて、あの男を再度観察。すると、彼は門を出て行ってしまった！

「しまった!!」

サージヤはあわてて飛び出す。もう既に彼の姿は見えない。

「……（イラッ）」

一瞬顔をしかめた後、ダッシュで彼を追いかけた。

「おいおい。もう2人目だぞ？夜になるまでには戻っておいで」

「（無視）」

門番の忠告を無視してサージヤは走る。

「うーん……しょうがない、帰ろつかスピカ……」

「……！」

あの男の声だ——しかも近くにいます！

サージヤはそうっと近くの木に身を隠す——そして位置を確認。

——すぐそこだ

足を忍ばせ、彼の背後まで移動。

「……火の精、サラマンダーよ。我に“永遠”スターチスの光を、輝きを」

ボソッと呟くと、どこからともなく薙刀が現れる——サージヤの愛用する武器だ。

すうっと息を吸う。そして——彼の首元目がけて、刃を滑らす。

「動くな」

「はいっ!？」

その男は見事なまでに竦んでいた。

ニヤツとすると、言葉を続ける。

「抵抗するな……動くとおまえの首は地面とキスすることになるぞ」

「えー……どっちもやだ……」

そろそろと彼は両手——降参という意味で上げる。

「き、君って、ランギルで僕のことすっごい睨んでた子だよね？」

「人違いだ。おまえなんて睨んでない」

「嘘だあ」

そう言われると、薙刀の刃をさらに首に近づける。

「おまえに発言権はない……おまえは何者だ？」

「はい？そ、そういう貴女こそ何者？」

「……発言権は？」

「……あ、ありません」

優男はシュンとなる。

サージヤは首に刃を当てたまま、彼の前まで移動する。

「で、おまえは何者なのだ？奴隷運びの手伝いをしていたと見えるが、どうみても商人じゃないだろう？何がした」

そのときだった。

優男の傍で大人しく侍っていた、スピカ——ニコーン一角獣が突然立ち上がり、ひらりと向こうへと走って行った。

「あ、スピ」

男は手を伸ばす——と同時に、彼のすぐ横の木の幹に光の矢が突き刺さった。

「!？」

彼はそのままの姿勢で飛び上る。

「あ、スピカ。こんなところにいたのか！よしよし……いい子だな！……で、覚悟はできてるんだろ？な、このハゲが……？あ？誰だ、おまえ？」

現れた黒ずくめの男が、鼻を摺り寄せてくるスピカを撫でながら言った。

> i 3 5 2 7 1 — 3 8 2 0 <

「あ！ーら、ライト！！」

ハゲと言われた優男が叫ぶ。するとライトは顔をしかめた。

「あ？なんで俺の名前を知ってるんだよ？……スピカが教えたのか？おいー……賢いなあ、おまえは」

さらになでなで……

「で、その女。おまえは誰だ？まさかこいつの同僚か？そうなりや……2人まとめて滅するしかないがな」

「……あいにく、おまえにこいつは渡せない……ライトとかいうおまえこそ何者だ？」

「あ、あはは……2人とも目がマジだよ……」

サージャとライトの間には見えない火花が散り、それを見つめる優男の表情はひきつったままだ。

——？——ランギルでの初日はどうやら平穏には済みそうになかった、主にサージャのせいだ。

第十四話（＊） 黒髪優男搜索の旅 （後書き）

サージャは常に武器を持ってるわけではありません。

運ぶのが面倒だから、自分たちの守護神的存在の「火の精 サラマ
ンダー」に預けていて、必要なときに取り出します。

親子の絆と役人の愚痴と（前書き）

うー、長いことあいてしまつて申し訳ありません。星羅です。
なんか…差し絵描いてたら無駄に手間取りました。

…クオリティは気にしないでください。ライトが豪快に断髪してる
のはドンマイです。

親子の絆と役人の愚痴と

「ロナロナロナッ！ちよつと起きて！」

そういつてロナが布団をはぎ取られ、無理矢理起こされたのは午前二時。

草木……どころか今お空に浮かんでいるお月様ですらついうとうとしかくなる時間。

そんな時間に、この家の主の一人——ルノは、異常はほどハイだった。

「ロナッ！あたし急にランギルに行く用事が出来ちゃって！サージヤが何か騒ぎ起こしたら困るし、出来れば早く会いたい人がいるの！」

相手が聞いているかどうかと言うことは二の次に、言いたいことを矢継ぎ早に話す。

「ふぁ……おねえちゃん……なあに……？」

「だからランギルに行きたくて！何か、知ってるような気がする人がいるかも知れなくて、その人が気になるの！くらつと来てふらつとして会わなきゃいけないような気がして！」

「ん、んうー……んー………よく分から……」

最後まで返事の出来ないまま、また寝てしまった。

無理もない。ロナはまだ子供。普通なら心地よく夢を見ている時間だ。

だが、それでもお構いなくルノは再びたたき起こす。

「サージヤ起きてっ！……あつ、違ったロナだった。」

「おねえちゃん……眠い……」

「寝たら今日の熊の仲間が来て食べられるよっ！」

「嘘っ！ヤダっ！」

眠気でぼんやりしていた頭が一気に醒めた。

幼心に、あの熊の丸焼きは恐怖だった。アレが生きていて襲ってく

るなど考えただけでも恐ろしい。

怖々とルノを見ると「よかった、やっと起きた」と一人ごこちだ。もちろん熊など居るはずもない。

「なんか…お姉ちゃん…意地悪…？」

まさか、日の昇る前にこうやって無理矢理起こされるとは思いもしなかった。恐怖心につけ込んだ嘘についてまで。

「……嘘つきい…眠い」

「いやあー、ごめんね。ちょっと急用で。嘘ついたことは謝るよ。でも起きないんだもん」

ルノの口ナに対する扱いは完全にサージャと同じになっている。

まあ…サージャに同じことをしたら、間違いなく復讐の一撃を食らうのだが。

「で、急用というのはね…」

「さーむーいー！ヤバイ！寒い！やっぱりもっと着てくれば良かった！」

「嫌だよ！これ以上厚着したら不審者だよ！」

ルノの言うことには、サージャが向かった先には、サージャが追いかけた人とルノが追いかけた人の二人が居るようで。どうもその二人が敵同士のようなので、サージャが行った先で、騒動になって巻き込まれて死んだりしたら、話が出来ないから早く行きたいと、そういうことらしい。別にそう簡単に死んだりしないのではないかと口ナは思ったが、ルノの説明の様子がどうにも必死だったので、口には出せなかった。

「でもさ…ほんとに口ナは来なくても良かったんだよ？家で待つてればお母さん帰ってくると思うし…」

ルノは口ナを起こしたときに、自分の家で母の帰りを待つか、ルノと一緒に来て途中で母に会うか、と聞いた。

ここからランギルまではほぼ一本道なので、ランギルに向かえば、

おそらく途中で母と出くわすだろう。絶対に会える。早いか遅いかの違いだけだ。

「いいの！早くお母さんに会いたい！」

「でも、たまに肉食獣が出たりもするよ…熊とか」

「え…うー…いい！行く！熊からお母さん守らなくちゃ！」

それを聞いたルノは一瞬驚いた顔をして、

「そっか。」

そう言つて優しげにほほえむ。

「じゃあ、行こ。」

「さーむーいー。さーむーいつ、さむい、さーむーいつ。さつむーい」

『さ』と『む』と『い』のみで構成された、即興の歌を聴かされ初めて速一時間。

いい加減、飽きた。

「お姉ちゃんうるさい！」

ロナも言うことに遠慮が無くなっている。

「だつてさあ…寒いんだもん。夜だしさあ。北に向かつてるしさあ。ランギルがここに引つ越してきてくれないかなあ」

「いや、無理だから。お姉ちゃん魔法使いなら、なんか暖かくなる魔法使えないの？」

……目から鱗。

「そうだつ！その手があつた！ロナ天才！偉いつ！」

ひとしきりロナを褒め倒した後。ルノはブツブツと何か呟きながら考え出した。

空中に色とりどりの文字を書き始めて、ロナが驚いているのも気にしない。

「んつと…炎系の魔法を体のまわりに…あー、いや、うーん。…ちよつと違う…ま、いいか、完成！じゃ、ロナちよつと離れてて。」

「はい」

「ファイア・レイズ・クرائم縮小版！」
天竜の焰

ルノが勢いよく叫ぶと、

叫ぶと…

…… 叫ぶと…… 何も起こらなかった。

「あれ？おかしいなあ…、ちゃんと配列を登録したはずなのに…。
どっか矛盾した所あったかなあ？」

「お姉ちゃん…縮小版ってなに…？」

ロナが若干引きつった笑みを浮かべて聞いたそのとき。

—ボウツ

「キヤアアアアー、おねーちゃん燃えたあああ。火いついた！水
つ水！死んじゃヤダあ！」

ルノのまわりを緋色の炎が取り囲んだ。

それは明らかに、ルノから発火しているように見えて。

でもって、この辺りに火を消せるような物はなくて。

火を消すには地面を転がるくらいしかないのだが、ルノはいつこう
に動こうとしない。ただその場に突っ立って居るだけだ。

「お姉ちゃん早く！火！火い消して！」

ロナが完全にパニックになって慌てふためいていると、突然炎の中
から声がした。

「いやいや、大丈夫だから。」

そう言つて、火の固まりは手（らしき物）を一降りする。すると一
瞬で炎は消え、無傷どころか服の焼け焦げなども一切無い、炎に包
まれる前そのままの、ルノが出てきた。

「いやー、暖かくなるってことは、体のまわりに熱い物があれがい
いんじゃないかと思っただけど、失敗だったねー。前が全然見えない
や。アハハ」

「いや、問題って…そこ？」

「え…他に何か問題あった？」

「え、んと…無いか。無いよね。」

魔法については、あまり気にしないことにした。深く関わらない方が身のためだと、直感がそう告げていた。

「でもさー、どうしょ。いい案だと思ったのに失敗しちゃったよ。」

「…ねえねえ、物を暖めたりする魔法って無いの？」

「んー…無いこともない。でも駄目なんだよ。元々体温って言う自分主体で変化する温度を持つてる物には効かないから、私を暖めようとしても出来ないの。」

「じゃあさー、まわりの空気を暖めるとか…」

…………… 目から鱗。第二弾。

「そうだっ！その手があつた！ロナ天才！偉いっ！」

「……そのセリフさつきとそのまま同じじゃない？」

「いいの、いいの！無機物の温度あげるだけなら簡単！……よっしや出来たあ！それじゃあ、いつきまーす！……今、大気の魔に、三連の理を捧げる。聞き届けよ！『何かほわって感じで、まわりが暖かくなったりしたら幸せだなっ！』——」

「何その呪文っ！」

そんな後半おふざけとしか思えない呪文を唱えたのにもかかわらず…目に見えて変化はない。ただ、明らかにルノの周囲だけさつきより温度が高い。

「やったあ！大・成・功！イエーイ！」

「いや…大成功はいいんだけどさ…さつきのって呪文だよね…」

「そうだけど…？」

「さつきのとか、最初の方は何かかつこよかったのに、何か…」

「ああ、何かほわって（以下略）が気に入くわなかったの？そうは言ってもね…。呪文考えるのめんどくさいし。ていうか、結構いい感じだと思っただけだ…」

「ないない、それはない。」

「ま、呪文はねえ、何でも良いんだよ、それで登録しちゃえば。簡単に説明すると、私の使ってる魔法は、『これからこの系統の魔法使いますよ』って言う意味の準備の呪文があつて、その後に大きく

魔力を引き出す呪文を挟んで、最後に『この魔法を放ちます』って呪文があるの。最後以外は飛ばすことに魔法も規模が減るかなあ…で、作った魔法は、最後の呪文でいわゆる保存？って…言っても分かんないよね…」

「うん。さっぱり。」

「ま。そう言うもんなんですよ。」

「ふーん」

そんなこんなと話しているうちに、二人はサロベイユの関所にたどり着いた。

そこにいた門番は偶然にも、先刻サージヤの相手をした門番だったのだが、二人はそんなこと知るよしもない。と言うわけで…

「おっじさーん、開つけて」

「うわっお前らこんな時間になにやってんだ！？歩いてきたのか！」

「そうそう、ちょっとランギルに用があつて。時間外なのは分かっているんだけどさー、開けて？」

ちよつとだけ可愛くねだってみるが、門番は険しい顔で首を振る。

「駄目だ。夜が明けるまで、ここは誰も通さない決まりになっている。それにここから先は、足場も悪くて危険なんだ。君たちみたいな子供を暗い中歩かせるわけにはいかないよ。他にも暗くなつてここに泊まつてる人がいる。悪いこと言わないから、今日は止まつて行きなさい。」

「いやいや、そんなこと言わずに！身分証明書だつて持つてるよ！ほら。」

「だーめ。」

「えー！じゃあ、いいもん！強行突…」

「ロナツ！！」

悲鳴とも似た、甲高い女性の叫び声がルノの言葉を遮った。

驚いて振りむくと、三十代半ばくらいだろうか、疲れてはいるようだがなかなか美人な女性が一心不乱にこちらへ駆けてくるところだった。

―あれ？…どつかで見たことあるような…

「お母さんっ！」

―あー、ロナのお母さんかあ…道理で見たことが…

「つて、お母さん！？もうここまで来てたの！？速っ！」

ここからランギルまで、ルノの足で歩いて二日半はかかる。それを…

「はあ……親子の愛だなあ……」

見れば二人は、涙を流して抱き合っている。

もう会えないかも知れない。その不安から、今解放されたのだ。

絶対会えるなんて言われても、その目で互いを確認しないうちは、不安は消える物ではない。

「…やつばいいなあ。私も早くサージャの所に行こう。…よし！おじさんこれ身分証明書ね。後であの男の子にこの手紙渡しといて。

あ、後、今度はサージャを遊びに行くねって伝えてくれると嬉しいな。」

「ちよつと待つて。だから夜が明けるまでは…つて、あれ？何処行つた？」

「ここだよ！堀の上！通してくれないなら強行突破するだけだから！じゃあねー」

そう言い残して堀の向こう側へ飛び降りる。

「いや、だから夜は…まあ、いいか。どうせ今日一人通しちゃってるしな。うん、仕方ない。……てか、とんでもない身の軽さだな

…ああ、俺もあんな特殊能力が欲しかったよ。そうすればこんなところで役人やらなくてもよかったのになあ…。おれ、伝説の傭兵とか、そう言うのに憧れてたんだよなあ」

感動の再会を果たした親子の涙も、役人の哀しい独り言も、暗い道を駆けるルノの鼻歌も呑み込んで、夜の闇は、まだしばらくその帳をおろしている。

二日後、夕暮れ…

「だからお前が何者なのかつつうのを聞いてるんだよ。同僚なのかな？」

「お前には関係ない。私はこいつに用があるんだ。」

「俺はどっちにも用事無いけどね…」

「答えないならイエスってことでいいな。ちょうどいい。さっき買ったナイフを使ってみるか。」

「何か勘違いしているようだが、まあいい。喧嘩を売っているのなら買おう。うるさいのが居なくなるならこっちも好都合だ。」

「あの…ちよつと俺の話を聞…」

『あ？』

「す、すみません…」

まさに一触即発。

どちらかが、動けば即座に殺し合いが始まりそうな、不穏な空気。

そこに…、やけにハイテンションな声が割り込んできた。

「はいー！ルノちゃんご登場ー！ただいま到着しましたっ！みんな楽しそうだね！」

「帰れ」

「誰だお前」

「え、救世主？」

反応は三者三様。引きつった表情を浮かべる優男が、突然の乱入者に「救世主？」等と口走ってしまったのも、状況が状況だけに無理もないだろう。

> i 3 6 3 1 4 — 3 8 3 9 <

「で、サージャ、なにやってんの？何となく事情は分かるけど」

「分かるならいいだろう。」

「サージャがその黒髪に用があつて、その金髪が、サージャを黒髪が仲間だと勘違いしてて、サージャがとばかりで怒られてる…で、いい？」

「まあ、大体そんなものだ。お前、記憶を見せてもらってきたな。」

「ピンポン！」

鷹揚にうなづくサージャと、満面の笑みで、手で大きく丸を作るルノ。

一瞬、場の緊張がほぐれたように見えた。

「ちょ、ちょとまで。じゃあ、その赤髪の女は、そいつとは無関係なのか？」

「…さあ。ただ同僚などと言う近しい間柄ではないな」

「なんだ…それを早く言えよ。」

「えーっと、注目！ここでルノから皆さんに一つ提案があります。私さ、その金髪の人に用事があるの。で、サージャと金髪の方は、そっちの黒髪の人に用があるわけじゃん。私ね、日が暮れる前にラングル一回入らなきゃいけないから、用事に時間かけられないの。だからさ、私の用事済ませたら、二人でその黒髪の人シメればいいと思うんだ。」

さも当然というように力説するルノ。

それに納得しようとする二人に、黒髪の優男は慌てて言う。

「ちょっとまって！その理屈おかしくない？俺ライトはともかく、この子にはシメられるようなことした覚えないし！っていうか、それ三人にしか利点無いじゃん！俺は公平公正な意見を求めるよっ！」

「え…だって私、君には用事無いもん。別に何処でのたれ死んだっていいもん。」

「ちょ、ひどっ」

何か文句を言っているが…無視。

「まーまー、と言うわけで、金髪のあなたに質問です。」

「ああ、何だ。」

突如始まった質問コーナーに若干戸惑いながらも、何となくルノの空気に流され答えてしまう

「あなたのお名前を聞かせてください。」

「…ライト。ライト・カシオウスだ。」

「んっと。じゃあライト。私の名前は何でしょう？」

「はああ？」

突飛すぎる質問にライトは返す言葉がない。

流石に急すぎたと思ったのか、ルノが慌てて説明しだす

「えっとさ、私、五、六歳の所辺りから前の記憶が無くて…、ライトには会った覚えがないんだけど、何となく会ったことあるような気がするの。それでね、私の直感が会いに行けって言ったの。こう言うときの感は絶対従った方がいいんだ。だからさ、私のこと知らない？」

「そんなこと言われてもな…何処かで一度偶然会ったとかじゃないか？」

「うつん、もつとしっかりした…いいからちよつと私の名前、あててみて。」

「知るかよそんなの！」

「いいから！何でも良いから言ってみて！」

あんまり必死にせかすので、何となく答えてやらなきゃいけないような気になった。

「クソ、なんなんだこいつ…どうせ当たんねえだろ…」

「じゃあ…ルノーラ。」

「ほら見るどうせ当たるわけが…え？」

見ればルノが目丸くしたまま硬直している。

「ま、マジかよ…いや、でもルノーラなんて、割とよくある名前だしなっ。」

「え…じゃあ、性はっ？性！」

「はあ？じゃあ…ノア？」

ルノがさつきよりもさらに驚いている。また当たったらしい。

だが、一番驚いているのはライト自身だ。

なぜノアなんて言ったのか、自分でもよく分からない。

ルノーラは適当によくある名前を言ったつもりだった。

だがノアなんて言う性はそうそう居ない。名前ならたくさんいるが、

「なんでだ？偶然…だよな。あんなやつ知らな…ん…？まてよ、

あのタンポポの眼…

・ズキンッ

「うあっ！」

突然、激しい頭痛が襲ってきた。

まるで、無理矢理記憶をこじ開けようとしているのに、必死で抵抗しているような…

・え？記憶？何で俺、今こんなこと…？

「大丈夫？ちよっと！ねえ！」

高いソプラノの声が無意味に耳に触る。五月蠅い、うるさい、ウルサイ…

「黙れっ！しゃべるな、俺から離れる！」

残った理性が、その怒鳴り方は理不尽だと注意するが、かまっていられる状況ではない。

幸い頭痛はすぐにおさまり、ライトが顔を上げると…

ルノは寂しげにほほえんでいた。

「ごめんね、無理させて。でもやっぱり気になるんだ。絶対、知らないいけない気がするんだ。だから、また明日行くね。何処に泊まってるのか教えて？」

後から思えば、ここで教えなければ良かった。もしくは嘘を教えるか。

こいつとの関わりをここで立っておけば、面倒ごとは少し減ったのに。

だが、このときは、そんなこと考えていらなかった。

ただ疲れていて、こいつに早くここから居なくなっただけだった。だから、

「赤いランタンの隣に、紅き騎士クプリユスって書いてある酒場だ。」

親子の絆と役人の愚痴と（後書き）

うん、まあ…そんな感じの話です。

ちよっとね…文章力のなさが浮き彫りになった次第です。はい。
そして長いです。私的にかなり。てか、ねみー…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5778u/>

RAINBOW! ~wanders of comet~

2011年12月3日19時50分発行